
とある次元の幻影燈機

幸坂師宣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある次元の幻影燈機

【Zコード】

Z9873M

【作者名】

幸坂師宣

【あらすじ】

ほとんどつていうか全部オリキャラで進行させてます。

本編の事件の傍流でネクラ少年とおせっかい少女が奔走する話です。当時は能力を自作するのが楽しくて楽しくて・・・とにかくそれらを活躍させたくてガリガリ書いてた覚えがあります（笑）

文体は原作に近づけようとして出来損なった感がありますが、大目に見て下さい；

最後までお付き合い頂けると嬉しいです。何卒よしなに

第一章 前日 Jummingo_Hertz_Level1.

2010-09-14 67

第一章 前日 Jummingo_Hertz_Level1.

「あーめんどくせー」

七月十一日 p.m. 5時37分、第七学区鶴来浦高等学校校門前。そここの生徒である辻霧単はちょっととしたトラブルに頭を抱えていた。橙色の夕日に照らされて長く伸びた影は、ただでさえ育ちすぎたもやしの様に細身な彼の体をさらに引き伸ばして路上に投げかけている。その隣にもう一人分の影があった。辻霧よりかは幾分健康そうなシルエットである。

「今日という今日こそ吐いてもらひからね。アンタの能力」辻霧の前で仁王立ちしてるのは同じくらいの歳の少女だった。ショートカットの髪型から若干ボーリッシュな印象を受ける。

少女は名を明田原早苗といつ。

尋問を受けている辻霧が主に気にしているのは彼女の背負つている身長の約三分の一くらいの長さの黒いソフトケースだった。

金属バット。

「いつの神経なら迷ひ」となく自分の頭でホームランを叩き出しそうだから恐い。

「だーから別に良いじゃん……そんな些末なこと気にするとかやめんどくさいだろ」

話は「」く単純で、まあ要するに辻霧はとある事情でこの間つかり自分の能力の一端をこのお節介なソフトボール部の少女に見られ

てしまつたのだ。極力他人との距離を測り、目立たないでいることを日々の目標に掲げている辻霧にとつては致命的なミスだった。ましてや見られた相手がこの若干16歳にして好奇心だけは幼稚園児並みという明日原早苗とあつては。

（最悪だ……）

この明日原という少女、五体を以て「青春」の二字を表現しているような人間である。いや、一人で青臭い思い出作りに励んでくれているだけならまだ良い。辻霧にとつて最優先で懸念すべき事項は、彼女がお節介にもその勝手に謳歌するに留めておけば良いであろう「青春」を叩けば増えるビスケットを与えるが如く周りにも散布していることだつた。例えばクラスで孤立している人間に救いの手を差し伸べるとか。

そういうつた押しつけがましい善意に対する回避の策として、ぎりぎり孤立しているわけではないように見える立場を辻霧が築き上ぐるのにどれほどの月日を要したか。その努力があの日水の泡と化したのだった。

「ありえねー、本当……」

「ちょっとねえ！　話を聞きなさいつてば」

「あ、UFO」

「ウソ！」

「ダーツシユ！！」

興味本位で何にでも手を出す相手なら別な物に興味を向かせれば良い。まさかあそこまで古典的な手に引っかかるとは仕掛けた辻霧本人さえ予想だにしなかつたのもまた事実だが……

「だーつはつは！！」

とりあえず、逃げる。

無いはずのUFOを探し出すべくあらぬ方向の夕焼け空を凝視し始めた明日原を置いて、辻霧は反対方向の人混みの多い通りに向かつて時速30キロで駆けだした。

ところが十秒で二つ妙なことに気付いた。まず駆け出す瞬間に見

た通りまでの距離感と今現在見ている通りまでの距離感が全く変わつていません。

まるで録画した映像が知らぬ間に巻き戻されていたかのように。そしてもう一つ。制服のセーターの襟首を万能のような握力で掴んで離さない感覚が。

首をギチギチと鳴らしながらつくり振り返ると、予想通り。明日原が左手で辻霧のセーターを掴んで獰猛な笑みを浮かべていた。

「その程度の速さであたしの『強制移動』^{アボーテーション}から逃げ切る算段付けられてたとしたら、随分ナメられたものね」

「あーそんな能力だつたなー」と重ね重ね露見する口の辻闇やに改めて内心舌打ちする辻霧。

『強制移動』。

十一次元上の絶対座標の理論に基づき、指定した物体を強制的に自身の元へ「引き寄せる」能力。

が、

「……とは言つてお前のそれって実質レベル2判定なんだろ？」

「あんもひつひつそこわね！」

キーッと歯噛みすると同時に空いている右手で道路に金属バットをケースごと叩きつける明日原。情けないことに「ひつ」という悲鳴が微かに辻霧の喉から漏れた。

確かに『強制移動』は実質自分自身の座標を基点としなければ発動できない未完成の能力であることは否定できない事実である。校内での成績に関しては他の追随を許さない領域であるにも関わらず、記録術^{かいはつ}に関しては芳しくない明日原さんなのであった。

「これでも身体検査では『^{システムスキャン}発展途上』^{エクスペクタブル}って呼ばれてるんだから…」

あーそーですかばーかばーか。

耳元でざきやーざきやー言われながら辻霧はもつひーでもいいやと半ば達してはいけない方向性で悟りの境地に達していた。

そこに、

「あーすはらア」

妙に間延びした女性の声が飛び込んできた。

新河幅揮あらかわはばきという名なら人間関係にある程度距離を置いている辻霧でも何度も聞いたことがあった。パツキパキの金髪に染めたロングヘアと片耳にアンバランスにぶら下がった大量のクロムハーツなピアスから彼女の素行の悪さが10キロ離れていてもふんと匂つてきそうだった。度重なる生活指導の陽和田からの注意に対しても馬耳東風の姿勢を貫き通し、それでかつ停学を免れているのは彼女の記録術の好成績によるものだと辻霧は聞いたことがある。

そしてこんな不良でも自らのネットワークに取り入れてしまつている明日原の顔の広さは最早驚異的であると言つ他無かつた。

「記録術の筋垣すじがきがまだ校内に残つてんなら呼んでこいとサ」

まさに辻霧にとつては青天の霹靂、天から降つて湧いた幸運だった。金髪ピアスの天使がいるよおかーさん。

「ええええ……くつ……この好機を棒に振るなんて……」
が、いかに他人へのいらぬお節介に日々身を尽くす明日原といえども教師の命令には逆らえないようだった。

肩越しに小物の悪党がヒーローに吐くような捨て台詞を辻霧に向かつてひとしきりぽんぽん投げつけながら、明日原は足音も荒く立ち去つた。あそこまで己の欲望に忠実だと、逆に尊敬に値するような気がしてきて恐い。

これが畏怖の念つてやつか……と妙に間違つた解釈に納得しつつ胸をなで下ろして辻霧に、服装違反の塊が声をかけてきた。

「まーあアンタも難儀なもんだナ」

「あら? もしかして貴女もかつてはアレに巻き込まれたクチでせう?」

「似たようなもン」

放つといたらタバコでも一服しそうな雰囲気で答える新河。

「まあ突発的なもんだしいつものことだから大目に見てやつてくれ」^三。いつも流されちまうのも一興かもナ。付き合い始めたら割と良

いやツだつたぜ、アイツ

「……俺は俺のスタイルで初志貫徹するつもりなんで」

「あ、ソ」

んじやあばヨ、と軽く手を振つて歩み去る新河の背中をちょっと見てから、辻霧は学校を後にした。

辻霧の住む学生寮は第一八学区にある。あえて学区外の高校に進学したのも彼なりにクラスメイトとの距離感を調節するためだつた。一週間ほぼ毎日この調子だつた。

日常を「自分自身をより大衆に埋没させるために必要なルーチンワーク」としてしかとらえていない辻霧にとつて、迷惑ではないと言えば嘘になる。基本的に何でも「めんどくさい」の一言で済ませようとする性格からしてみれば面倒極まりなかつた。

それなら引きこもるなり学校やめるなりすれば良いという見方もあるだろうが、それは避けたかつた。社会問題的な意味で。

辻霧が学校に通つてている理由なんて精々「学歴が欲しいから」ぐらいだつた。

他人の事情に深入りすると口クなことにならないという経験は嫌と言つほどあつたから。

（その点、明日原はどうなんだろうなー）

自分の事情と相手の事情を共有する輪を広げるといつ行為が辻霧にはあまりよく理解できない。

第一八学区で下車し、駅を出でからも考え方をしながら歩いていふと、反対側から歩いてきた十代後半くらいの不良のグループにぶつかつてしまつた。

「……ツて」

「どじ見て歩いてやがるブロッコリー頭がアー！」

どうやらぶつかつた時に不良が持つていたアイスクリーム（笑）を盛大に不良の服の前側にべつたりぶちまけてしまつたらしかつた。激昂した不良を前に危機感が麻痺しているのか冷静に分析してしまう辻霧。

しかしブロッコリー頭、か。確かに辻霧は割と自分の身だしなみには気を使わない方だし、髪を切ったのも今では何年も昔のことのよつな気がする。よくボサい、と人に言われるし。

出会って十秒くらいでよくも的確に愉快なニックネームを付けたもんだーわつはつはと辻霧が路上に尻餅を付きながら素直に感心していると、ぶつかった連中の視線にこもる殺気が炭酸飲料にラムネを一粒落としたときと同じくらいの激しさでもつてぐんと増したような気がした。

て言うかやばい。どう考へても学生の格好には見えないわけですが。

「なああアアにニヤニヤしきサツとんじやいフレウたるシヤぬしゃああアア！！！！！」

何これ何弁ですかつか言ひてゐこと分かんないつば飛んでくる巻き舌多い恐い。

一瞬で軽い恐慌状態に陥つた辻霧の襟首を掴んで立たせると置みかけるよつな怒濤の方言ラッシュ。ていうかつぱ汚い。汚いつつに。

「おい妹綴まいとじ」

後ろの方にいた痩せた背の高い男が声をかける。辻霧の胸ぐらを掴んで絶賛クレーム中の男は妹綴という名前らしい。

あ？ と鼻息荒く振り返つた妹綴にぼそぼそと何か耳打ちする男。辻霧には会話の内容は聞こえないのだが、それを聞いた妹綴がいやーな笑みを浮かべていたところからしてどうやら少なくともつばが飛んでいるから自重しろといつた内容ではないようだ。

「そオカア……お前どうやら能力者らしいなア。悪イがオレらも一応『スキルアウト』に縁があるもんだからよオ……ちょっと落とし前の付け方も派手にやらせて貰うぜ」

あれ？ 倭路地裏に連行されてね？

それから二十分後の話である。

通行人から「高校生が不良に路地裏に連行された」との通報を受けて駆けつけた風紀委員の報告によれば、現場には既に明らかに返り討ちにされたとき不良の男が七人転がっていた。

全員極度の興奮、混乱状態に陥っているらしく、詳しい事情調査に関しては困難を極めたが、七人とも口走った証言の内容は概ね一致していた。

何をされたのか全く理解できなかつた、と。

かがみおおじ まきな
鏡大路時奈は第十八学区のコンビニにいた。

本来彼女の属する常盤台中学校は第七学区にあるはずなのだが、わざわざ彼女が電車代をかけてここまで足を運んで来たのには理由がある。

1270ページの分厚い雑誌の立ち読みを終え、三冊目の週刊誌に手を伸ばしかけたときに、コンビニのウインドウ越しにその「理由」が歩いて来るのが見えた。

平均的な身長の男子中学生だ。しかし全体的に「男らしさ」とは無縁の外見をしている。耳を覆うくらいの柔らかい黒髪と、「小学校中学年です」と主張しても納得できてしまいそうな童顔。

鏡大路がアイスを買ってからコンビニを出て声をかけると、伏し目がちに歩いていた少年は顔を上げて軽く笑みを浮かべた。

「時ちゃん」

「駄目だろ透通。この時間に一人でふらふら歩いてたら」

透通と呼ばれた少年

さかうひすきとお
逆浦透通は、左腕にピンで留めてある緑色の腕章を引っ張りながら口を尖らせた。

「これから風紀委員の詰め所に寄つてから帰るから大丈夫だよ」

人口にして一三〇万人の学生が日々超能力の開発に勤める学園都市。そこで度々起ころる能力を駆使した少年犯罪を取り締まり、治安維持に奔走する選抜された生徒の集団である風紀委員は、透通の様なお世辞にも強靭とは言い難い一介の少年には重すぎる任ではないのか、と時折鏡大路は危惧する。

それよりも現在鏡大路が心配しているのは最近第一八学区で多発している能力者による通り魔事件だ。今日鏡大路が逆浦の下校に付き添おうと第一八学区まで足をのばしたのもこれが理由だった。

夕方頃に人気のない道を歩いている生徒を路地裏に引きずり込んで襲うという悪質な手口で、五日間すでに犠牲者の数は二桁に上るという。

「それなら別に良いが……寧ろお前が風紀委員だからという理由で襲われないか心配だな」

アイスのパッケージを開けながらなおも三歳年下の従弟の身を案じる鏡大路の言葉に逆浦は若干不機嫌そうな表情になつた。

「大丈夫だよ。と言つより僕が時ちやんを心配してんんだ」

「？」

怪訝そうな顔をした鏡大路に逆浦は疲れた様な顔で言った。

「一連の通り魔事件なんだけどね、被害者は全員レベル3以上の高位能力者なんだ」

「…………不自然だな…………」

思わず鏡大路がぽつりとつぶやいた。

能力者が無能力者を襲う「狩り」が一部の学区の裏で横行しているという反吐が出るような話ならたまに聞くことがある。

しかし今回の事件における被害者は全員高位能力者だ。

一応鏡大路も常盤台中学が擁する四十七人の大能力者レベル4の一人である。逆浦の話が本当ならば確かにこの場において犯人に狙われるのは自分の可能性が高い。

逆浦は続ける。

「それだけでも変なんだけどね……全員手口ハンドが違う、といつのか」

「手口ハンドが違う?」

「その……被害者は全員自分自身の能力で傷付けられたような痕跡ハラツキがあるんだよね」

それを聞いて鏡大路は自然と歩調を落とした。

「自分自身の能力で傷付けられた。」

「発火能力者ハイロキネシスト」

鏡大路が眉間に皺を寄せて黙り込んだのを見て、逆浦は心配そうに顔をのぞき込んだ。

「蒔ちゃん?」

「ああ、すまん」

鏡大路は顎に添えていた手を離すと、何でもないよと言つ風に苦笑して見せた。

「……てことは犯人の能力は自分が受けた能力をそのまま相手に返す能力、か?」

「にしてもおかしいんだ」

逆浦の表情は冴えない。

「それならもつと集中的で大きなダメージが被害者の身体にあるはずなんだ。でもどつちかというと何か当てずっぽうに跳ね返した能力が分散して何発か偶然当たつたみたいな……」

「…………脇に落ちないな…………それじゃ書庫バンクに検索をかけることもままならないじゃないか」

それを聞いて逆浦が思い出したように言つた。

「そういえば一週間前に第十八学区内のデータベースに誰かが侵入した形跡があつたな……」

「通り魔か?」

「いや……つまく痕跡を消してたから明確には誰とは断定できないけど……僕はその線が濃いと思ってる。実際警備員もその方向性である程度調査してみるって方針になつたみたいだし」

学区内の学生のデータベースさえ手に入れば性格に標的を絞ることができるからだろう。犯人は今もデータベースから抽出したリストの被害者の欄に舌なめずりしながら撃墜^{キル}マークを付けているかもしないのだ。

その時、不意に逆浦が目を見開いた。

「どうした？」

鏡大路が声をかけると、逆浦は視線を固定したまま答えた。

「何か聞こえた」

鏡大路の体に一気に緊張が走る。彼のこの何気ない言葉が緊急を意味していることを鏡大路はよく知っていた。

『妨害聴覚』。レベル1でありながら彼が風紀委員に選抜された理由はこの能力による影響が大きい。大気中に存在する波と名の付くもの全てから指定したものにのみ干渉し、雑踏の中で交わされる会話を盗聴したり電波によるやりとりを妨害したりと、要は情報戦に役立つ能力ということで重宝されたのだ。逆浦本人は「盗聴能力なんてイヤだよ」と度々鏡大路に愚痴をこぼしていた。

目を見開いたままの逆浦の口から、読みにくい筆跡の文字を解読するような機械的な声が切れ切れに紡ぎ出される。

「別働セイカ」「ループ確認、CヒュームATM取外ス」「作業ラ終工タ後別ルマランテ」「ポイント二ヒューム機、武装班三人毎二分ケ、アシ確ヒューム終A班」「データロードマデ移動ヒュームノC班二隨行サセ……」

「また随分と平和的でない内容だな」

緊張した面もちに引きつった笑みを浮かべる鏡大路。

その時、

「ゴバッ！！」と音を立てて通りの向こうの銀行の壁が吹き飛んだ。

まばらな通行人たちが悲鳴を上げて逃げ出す中、粉塵の中から武装した覆面の強盗が数人飛び出してくる。

「やれやれだな……警備員もしばらく来ないだらうし。逆浦、下がつて良いぞ。あ、あとこれ持つてて」

冷静にそう指示を出し、食べかけの「ガリゴリ君メロンソーダ味（おみくじ棒付き）」を預ける鏡大路。

「え？ あ、ちょっと待つて……」

逆浦が止めようとするのも聞かず、鏡大路は逃げ出す大衆の動きとは逆方向に歩き始めた。

強盗達としては予想外の動きだつたようだが、一人が鏡大路を高位能力者と判断したのか、隣の仲間が制止するのも聞かずあろうことか肩に担いでいたミサイルランチャーをぶつ放してきた。

HsMR-64。学園都市では約5年前に生産されたモーデルだが、一介の強盗が所持するにしては莫大すぎる破壊力と殺傷力を秘めている。

「おい冗談だろ……」

それを見て鏡大路はぎょっとして前に一步出た。

次の瞬間すさまじい速度で飛んできたミサイルを鏡大路は片手で受け止めていた。慣性の法則に従つてミサイルの発射と共に吹いた風が鏡大路の前髪をわずかに揺らした以外は特に何か反動があつたわけでもない。少女が触れた瞬間、まるでビデオの一時停止のボタンを押したようにピタリとミサイルの動きが「静止」した。

「……こんな前時代的な武装で私に立ち向かうなんて」

警備員は何をしているんだ、と鏡大路は呆れたように呟く。その右手が受け止めているミサイルがバキッ！！ という音と同時に真っ白になった。より正確に言うならば、突然摩擦弾頭フレイムクラッシュによって25

00度まで熱されていたミサイル全体が霜に覆われたのだ。

自分が受け止めたミサイルにすでに興味をなくした鏡大路はさうに強盗達に歩み寄る。HSMR-64を受け止められたことでパニック状態になつたらしき強盗達は、反対側の通りから走つてきた盗難車だと思われる装甲板で固められた四輪駆動車に慌てて乗り込むと、ドリフトをかませながら猛スピードでその場から逃げ出そうとした。

逃げ出そうとした、というのは、彼らが乗り込んだ途端鏡大路の手から発された氷の槍が装甲車に装備された防弾ガラス製のバックガラスからフロントガラスまでを貫通し、装甲車を氷漬けにしていたからだった。

鏡大路はシャフトまで固まつたらしく全く動かなくなつた装甲車に近づく。乗車していた強盗は全員奇跡的に槍の射程上にいなかつたらしい。

凍つたガラス越しに恐怖の視線を送る強盗達に向かつて鏡大路は装甲車に手を付きながら、できる限り暖かく柔和な微笑みを浮かべ、丁寧な口調で話しかけた。

「今から車内に存在する大気中の気体分子の運動を全て静止させます。投降するなら今ですよ」

「声が届かなかつたのか、あるいはまだ抵抗する氣があつたのか、強盗達は怪訝そうに顔を見合わせた。

なおも言葉を続ける鏡大路。

「えーと……」理解いただけない様なので噛み砕いて説明させてもらいます

「今からこの車ブッ潰すつて言つてんだよ

その言葉と同時に。

「ゴベキヤアッ！！！！」といつすさまじい破碎音と共に装甲車は圧縮したアルミ缶のように内側に向かつてつぶれた。防弾ガラス製の窓も全て粉々になつて車内に吹き飛ぶ。その隙間からマイナス273度の氷の塊が大量に突き出ていた。

イカれた芸術家が感情に任せて製作した奇妙な形のオブジェのようになつた装甲車を路上に放置したまま、鏡大路は今し方ふらりとトイレに席を立つた後のような気軽さで逆浦のところに戻ってきた。逆浦は呆れたように、

「だから警備員が来るまで待つた方がいいと思つたんだけどね……時ちゃんの『通行止め』は加減できないから……」

「動けないようにしてときやいいんだろ、要は」

そう言いながら鏡大路は逆浦の手から食べかけのアイスを受け取る。先程預けたときから全く溶けていなかつた。

その時、

「『触れた物体の質量、熱量、体積に関わらず慣性を無視してその運動状態を「静止」にする事ができる能力』、ねえ……まーあ面白いもん見せてもらつた」

野次馬の群の中から聞こえてきた賞賛とパチパチという軽薄そうな拍手に、鏡大路と逆浦は振り返つた。

✓ネックの紺色のセーターを着た全体的に色素の薄い男だつた。染めたわけでもないボサボサの天然の茶髪と白い肌が、群衆の中でも際立つた外見である。それでも風景に溶け込むような印象であるのがやけに不気味だつた。

隣にいる逆浦が警戒するように身じろぎしたのを見て、鏡大路が声をかけた。

「辻霧」

「相変わらずだなあ、『通行止め』」

ポケットに入れて旧友に再会したようなくだけた口調で話す辻霧。だが言葉の調子とは裏腹にその顔は一見無表情だった。鏡大路も彼とは割と長い付き合いで気付いたのだが、こいつは感情が表に出にくい性質らしい。

「大方その辺の野次馬に混じって見物してたんだろう。お前が手伝つてくれれば遙かに楽だったんだろうがな」

「いや、ちょっとした面倒事に巻き込まれちゃって、な」

「まあお前の場合そうでなくとも手助けなんて真似はしないんだろうが」

おーよくわかつてるじゃんと感心した辻霧から軽い舌打ちと共に顔をそむける。

「んじゃ俺六時半から見たいテレビがあるんで」

「おう。早めにくたばれよ」

おおよそ一方的にバイオレンスな挨拶を交わすと、辻霧の姿は人混みに紛れてやがて見えなくなつた。

しばらくしてから今まで黙つていた逆浦がじとつとした声で尋ねてきた。

「…………誰？　あの人……蒔ちゃんの友達？」

「ん？　ああ…………まあ、知り合い、だな」

「…………彼氏？」

「そう見えたか？」

言われてから逆浦自身も馬鹿な質問をしたと思ったのか、ばつの悪そうな顔で「全然」と答えた。

「さて、と」

鏡大路は軽く伸びをすると、そろそろ警備員の車両が集まり始めた事件現場の方を見やつた。

「と言つわけで取り調べやら何やら巻き込まれると面倒だし、私はここで退散させてもらつから」

「え？　でも……」

「あー、アレに關しては付近にいた見ず知らずの高位能力者の方が善意の下に天誅を下しました、とでも言い訳しておいてくれ。幸い私はこここの学区の生徒じゃないから、足も付かないだろう」

それじゃ、と鏡大路は事件現場を後にした。

そして。

その後ろ姿を遠くから凝視する人影があった。

七月十一日、先日で第一八学区における通り魔事件の被害者は二十人に達し、いよいよ学区外の教育機関としてもこれを無視できなくなってきたのか、その日の飛行船の側面に取り付けられた大画面で放送されている朝のニュースでは「第一八学区で多発する能力者による連続通り魔事件」に対する学生への注意喚起が呼びかけられていた。

「はー物騒な世の中だねえ」

辻霧単は高架橋の手摺りに身を預けたまま他人事のように呟いた。大画面では今度は見覚えのある壁に大穴の空いた銀行が映し出されている。

昨日の強盗はスキルアウトの一派だつたらしく、警備員本部の武器庫で強奪を行つた後逃走、その足で銀行強盗に踏み切つたらしい。ある程度組織的な動きも見られたところからして計画的な犯行だつたようだ。

『……警備員側では本件に関して事件の解決に貢献した能力者を捜索しており、目撃者の証言を元に……』

アナウンサーの温度差の少ない声を聞き流しながら辻霧は手摺りから身を離すと、高架橋を降りて学区間を行き来するリニアモーターラインのプラットホームへと向かった。

時刻はとつぐに8時を回っていた。彼の場合基本的にあの『朝のホームルーム開始10分前の馴れ合いの空気』が苦手なので、それを回避すべく遅刻ギリギリの時間に教室に到着するよう計算して登校している。

まだ生まれたての活気が足下を漂う地下街から階段を上つてホームに到着すると、見覚えのあるポーテールの少女とばつたり出くわした。

「あら、うー？ 鏡大路さんじやないの」

「…………お前か」

「…………、」

出会い頭そこまで露骨に嫌そうな顔されると、ねえ。

心の傷は表情の奥に引っ込んで、構わず辻霧は話しかけた。

「お前の住んでる寮つて第七学区の『学舎の園』の中じやなかつたつけ？」

「何でお前がそこまで私の私生活に詳しいのかについてはあえて追求しないでおいてやる。ちょっとした野暮用だよ」

「追求しない」と言つておきながら何だか心の距離感が一気に極寒の未開地レベルにまで引き離されたような気がする。

誤解のないように言つておくと、辻霧が鏡大路の住所を知っているのは、以前携帯電話番号を交換した際にパーソナルデータの欄に「丁寧に番地まで入力された状態で住所が記載されていたからだつた。多分、と言うか絶対自分でやつておいて忘れている。

変なところ律儀なくせに妙に抜けてるよな、とひそかに胸の内で辻霧は忍び笑いを漏らした。

「野暮用ねえ……まあ俺には関係ないけど、大方昨日一緒にいたシヨタつぽい子の送り迎えつてとこか」

「なつー？ シヨツ……お、お前にはかかつ、関係ないだろ！」

「うえー？ 図星？ ていうか俺事前に『関係ないけど』つてわざわざ予防線張つておきましたよね？ 痛い痛いやめて脛蹴らないでローファーの踵で小指を攻めないでーつ！！」

リニアに乗車してからも鏡大路はピリピリした空気を纏つていた。そんなに嫌なら離れて座ればいいじゃん……と未だ深刻な小指のダメージにちょっと涙目になりつつ辻霧は思うのだが、なぜか彼女は辻霧の隣にちょこんと腰掛けっていた。

最先端の防音設備でもつてモーターの駆動音まで遮断されている車内は、新聞を広げる音やせき込む声なんかがやけに大きく響く。めまぐるしく移り変わる車窓の外の景色を眺めながら辻霧はのんびりと小さな声で話しかけた。

「そいや今朝のニュースでお前のこと出てたけどさ」

「…………」

「名乗り出ないの？」

「…………あまり有名になつてもあとから仲間に付け狙われたり出所したやつらからの報復やら面倒だろう。連中乗員の内半分が骨折、三分の一はひどい凍傷で内一人が意識不明らしいからな」

「うわあ…………」

鏡大路は別に自慢するわけでもなく淡々と結果を述べる。それでもその下で押し殺した感情が暴れているのを辻霧は敏感に感じ取っていた。善意の下に起こした行動とは言え、やはり人を傷つけるのはこの大能力者にとって気持ちの良いものではないらしい。「面倒」と言つたのも本当は報復に次ぐ報復で相手の身を、自分の心を傷つけるのがいやだからなのだろう。

その躊躇が、彼女がレベル5へと覚醒するのを押し止めているのだと分かっていても。

「…………、」

「…………、」

「…………、」

しかし、その、何だ。

こういう空気は辻霧の苦手とするところだつた。ていうか気まずい。

(…………めんどくさいな)

そろそろ辻霧が重圧に耐えかねて口を開くにつとしたところで、リアは常盤台中学校学舎の園前で停車した。

「それじゃ

そつけない挨拶と共に鏡大路は席を立つた。

「おお」

ほつとしているのかもどかしいのか、複雑な心境のまま辻霧が言った。

リニアのドアが音もなく滑らかに辻霧と「面倒事」を遮断する。

それでおしまい。

それ以上辻霧が彼女に深入りすることはない。

辻霧が昼休みに弁当をつついでいると明日原がずんずんとこちらに近づいてきたのである野郎ついに昼休みで衆人環視があるつてことも構わず強硬手段に出やがったかと弁当を放つて命がけの逃避行を繰り広げようとした矢先ああそいえばこいつの能力の前に逃走は無意味だったなあとか思い出してしみじみとしてる間に襟首掴まれて無理矢理座席に連れ戻されましたが俺はこれからいかなる拷問を受けさせられるのでせうと半ば覚悟を決めたりとかしてその後。「すいません……俺故郷に残してきた病弱な妹がいて……両親も俺が十歳の時にぽっくり死んじまして……その、何どぞ命だけは勘弁して下さいいや本当」

「ハア？ 何を身構えてんのよアンタは…………」

捕まつて四秒でパーフェクト土下座スタイルをキメた辻霧は「は？」と本日一度目の涙目で顔を上げた。明日原は珍しく金属バットは持つていなかつた。

「あのねえ、アンタの能力に興味があるとは言つてもそこまで病的じゃないわよ」

「……じゃあ何の用だよ…………」

「とりあえず危害は加えないから土下座はやめなさい…………」

ふらふらと立たせてもらつても辻霧はなおもじめじめと疑惑の視線を送つていたが、明日原は特に気にせず呆れたように腰に手を当てて言つた。

「今朝のニュース見た？」

「銀行強盗のことだつたら俺は知らん。 何も知らんからな」

「まだ何も言つてないでしようが、……ていうかそつちじやなくてあたしが言つてんのは例の通り魔事件よ」

それを口に出したとき、一瞬だけ明日原の表情がかげつたように見えた。

「それを何で俺に聞くの？」

「アンタ確か第一八学区に住んでるんでしょ？」

はて、そんなことをこいつに言つた覚えはないのだが。今朝出会つた鏡大路のことを何となく思い出しながら、

「いや、まあそだとして何で？」

「何か知らない？」「うう……事件現場付近に住んでる人として入ってくる情報、とか」

「無いね」

とりあえず即答した。

明日原が何か言つ前にさらに続ける。

「て言うか知つてどうするの？ まさかとは思うがお前高校生の分際で赤い蝶ネクタイの少年探偵気取りでバビッ事件解決しちよつとか目論んでらっしゃる？」

「うん」

「即答かよ！ ていうか俺もさつき即答したけど……」

「そしてアンタにもある程度協力してもらわよ」

「流れがつた切りで人をさらうと巻き込んでんじゃねーよ…… て

か今のやりとりでどうしてそうなつた！？」

「事件現場周辺の地理に詳しい人がいれば捜査が有利に進むでしょう？ それに一緒にいればその内アンタが能力のことでボロを出すかもしれないじゃない。まさに一石二鳥」

「きれいに纏めてんじゃねーよ……」

「補足までに言つと理由は今思いました」

「あつれー？ 変だなー？ その前の俺を巻き込んだ理由に関してはスルーの方針ですかー？」

ぜえぜえ息をつきながら上目遣いに明日原をにらむ辻霧と余裕の

態度でそんな辻霧を見下ろす明日原。

やおら辻霧が口を開いた。

「はあ…………わり。俺もうお前が何考えてんだかわからんね」

「理解されようとは思わないわ。とりあえず放課後に旧体育館裏で逃げようなんて考えんじやないわよ。アンタの逃走経路は全部絶対座標で抑え済みだし記録術の方も17ページの『大脳生理学的見地から考察する能力開発の誘発物質』に関するレポート提出で筋垣を黙らせてるから。じゃ」

一気にまくし立てると明日原は嵐のようになその場を去った。

放課後までの残り8820秒で脱走方法を考えられようか、否、できない（反語）。

一いつときにつけて時が経つのが早く感じられるもので、気が付くと状況はすでに夕日に照らされた体育館裏に脅迫者と共犯者が向かい合つて立つてているというあまりときめかないシチュエーションに入っていた。

「さ、行きましょうか」

そう言つ明日原の目には一点の罪悪感による曇りも見受けられない。

勉強に部活に行事活動に交友とまるで絵に描いたように忙しい青春ライフサイクルを絶賛エンジョイ中の明日原さんは実は学区外まで足を運ぶ経験に乏しかつたらしい。これつて単に俺が学区外探検の案内人に駆り立てられてるだけなんじや？ とリニアの窓に鼻を押しつけんばかりにして外の景色への興味を示す明日原を見ながらそんな疑惑を持つた辻霧だが、すぐに頭を振つてその考えを追い出す。こいつの場合それだけで済む気がしない。

目的地で下車し、地下街を通りて事件現場へと向かつた。

「『第一の被害者、錦織継葉^{にしきおりつぶは}。レベル3の『不動回転^{スクロールシャфт}』。要は自分自身を中心とした竜巻を作る能力ね。』戦闘があつたと思われる路地裏から15メートル離れたファミレスの裏で昏倒していたところを保護される』……か」

明日原は何やら細かい文字のびつしりと並んだコピーユ用紙の束を持参していた。気になつて尋ねてみたところ、風紀委員の知り合いにこゝそり頼んで事件のデータを入手していだらしい。この調子で「学園統括理事会にも知り合いがいる」と言われても今更辻霧は驚かなかつた。

明日原と辻霧は事件現場を事件が起きた順に回つていった。

「次は……と、『第四の被害者、形海弧削^{なりうみ じそき}。レベル4の『不定形炎^{マルチフレイム}』。出現させた火球の形状、温度を自在に操る能力で……』『現場付近で全身に軽度の火傷を負つた状態で保護される』……んー辻霧？」

事件現場である路地裏から明日原が声をかけると、辻霧は近辺のファンシーショップの横に設置されていた自動販売機で一服していたらしく、路地裏の入り口から顔を出してやる気のない返事をよこした。

道中ずっとこの調子だったので明日原はとつぐに彼に渴を入れるのを諦めていた。

構わず明日原は自分の推理を報告する。

「ちょっと明日原さん気付いたやつたよ」

「……何だよ」

「これひょっとすると被害者は全員自分自身の能力でやられてるんじゃないかな！？」

「おーすげーよく気付いたなー」

五百ミリリットルのヤシの実サイダーを一気飲みしながら氣怠げに応対する辻霧。補足までに言つと、明日原が現場を梯子して一時間目にしてようやく気付いた事実に辻霧は最初の現場へ向かう道中軽く資料に目を通した時点で気付いていた。だが心優しい彼は明日原のプライドを鑑みてその事実を伏せておく。

「…………とすると犯人の能力は相手の能力を直接相手に跳ね返す能力？ しかしそれにしては被害があまりに軽い……」

「んむむーと『名探偵の推理ポーズ』で熟考を始める明日原だが、

助手のワトソン（仮）こと辻霧はあまりにやる気がなかつた。
時刻はそろそろ7時を回るつとしていた。

鏡大路蒔奈は逆浦を彼の属する手親女中等教育学園学生寮の前まで送つた後、第七学区の自分の寮に帰宅すべく夜道を急いでいた。
学生寮の多いこの近辺は、この時間帯だととつぐに帰宅する早朝型の学生とまだ街の方に残つてゐる夜遊び型の学生に分かれるため、特に人気がなかつた。

（通り魔のことも気にはなるが……まあもし出会つたらその時がそいつの年貢の納め時、だ。逆浦のためにも、ヤツの止めは私が刺す）
そう思考しながら児童公園の向かいの塀の角を曲がつたその時、

ぞわりと、

全身にかつて経験したことの無いほどの不快な感覚が走つた。

（何が !?）

振り返る必要もなかつた。
身構える必要もなかつた。

そいつは。
身を隠すこともせず、堂々と田の前の街灯の下に姿を晒していた
のだから。

「 ツツツ ! !

圧倒的な敵を田の前にしたときの重圧とも違つ。
不快。

ただ不快だつた。

慄然として立ち尽くす鏡大路と対照的に、そいつは悠然とした態

度で構えている。まるで町中で知り合いと待ち合わせをしている途中の気長な少年のようだ。そう、高校生くらいの少年体格からいつてそう判断できるだろう は、赤いパークーを着込み、マイナーな球団のロゴが入った藍色の野球帽をかぶっている。その上からさらにパークーのフード。顔を見られないようにする為の対策にも、単なるファッシュショーンのようにも見えた。じりじりと、何時間も経つたような気がした。いや、数秒だったかもしれない。突然目の前の少年は気軽に動作で体の向きを変えると、近くの暗い路地裏に姿を消した。

(誘っているのか
?)

だとしても、鏡大路がすべきことは変わらない。

静かな足取りで、だが迷うことなく今し方少年が消えた路地裏へと近付いていく。

思った通り、さつきとまるで同じ姿勢でそいつはそこにいた。

「…………いいだろ?」
知らずと鏡大路の口元には獰猛な微笑が浮かんでいた。ゆつくりと、まるで重たい拳銃を構えるように右手をそいつの方へ向ける。

指先が、大気中の微細な分子に触れる。

「…………始めようか」

そして、

第三章 七月十一日 Appor tation_Level 2 .

第三章 七月十一日 Appor tation_Level 2 .

辻靄單と明日原早苗は第一八学区のファミレスの中にいた。

「捜査」はとりあえず六人目の事件現場を見たところで一旦おひらきということになり、時間も時間だったので一人で近辺のファミレスに立ち寄ることにしたのである。

(それにしてもねえ)

『減量中の貴女にお勧め！ カロリー控えめチーポテグラタン』とかいうチープなメニューをそもそも口に運んでいた辻靄はため息を吐いた。

おおよそ二時間弱歩き回つてみて、本日の成果は皆無に等しいと言つても過言ではなかつた。いや、田の前で『夏こそ燃えるぜ！！ レツツチャレンジ黒毛和牛の七百グラムバーニングステーキ』を豪快に頬張つている明日原が、「そもそも現場を歩き回る以前に自宅で資料に田を通すなりして考察すれば今日得たものと全く同じ答えにたどり着いたのではないか」という根本的な部分に気付かなかつただけ、寧ろ成果はマイナスだったと言えるのかもしれない。

と言いつつ、ここまで胸中でグチを垂れている辻靄自身も実際はそれほど大した働きはしていなかつた。

「お前さあ…… もうひょっと自宅で資料に田を通すとかしつけよ…

…

フォークを動かす手を止めて辻靄が申告したが、果たして食事に没頭している明日原にその声が届いたかは疑わしい限りだつた。

一応それは杞憂に終わつたらしく、『っくんと肉の塊を飲み込んだ明日原は、

「そりや田は通したわよ。でもやつぱり現場の空氣に触れて初めて分かる事実つてのもあるもんでしょう？」

「ああ……そり……」

もうお氣の済むまで歩き回るがよろしいかと。

その後は一人とも黙つたまま田の前の夕食と格闘していたが、しばらくしてから先にグラタンを腹に収め終えた辻霧がまた口を開いた。

「そう言えばお前さ、何でこの事件の捜査に乗り出したわけ？」

「…………」

「『理解されようとは思わない』って言つてただどさ。一応そこそここはつきりさせておいてくれないと俺としてもすつきりしないわけなんだが」

「珍しいわね。アンタが何かに興味を示すなんて」

「いや……流石に自分が何のためにこんな重労働を強いられてるのかつてことぐらい知りたいと思うよ」

明日原は考え込むよつにステーキの欠片を咀嚼していたが、やがて、

「やつぱりね、自分の身の回りにあるものには何にでも興味を持たなきやもつたといいと思うわけ。こつやつて自分のためだけに馬鹿やつて、明日食べていい」と以外のこと考えていいられるのは今だけだと思つ……から

「俺のこともこの通り魔事件の調査もその延長線上つてわけか？」

「ん。そこまで極端じゃないかもしけないけど、まあ似たようなもんかもね……あと通り魔事件の捜査に関してさりとて言つとそれだけじゃない」

その時少しだけ、明日原の表情が真剣味を帯びた。

「これは人としてすべきことだと思うからやつてるの。人間が他の生き物と違つて『えられる特権つて分かる？…………高度な知能とか繁栄とか、そういう上づ面の進化論で語られるようなことを言つてるんじゃないのよ。私はそれを相手を思いやるつてことだと考

えてるわけ。その形は特に決まってるわけじゃなくて……相手を敬つたり、好きになつたりすることだけに限定する必要はない。例えば憎いと思つたり嫌悪することだってそういうカテゴリーに分類できると思う。詰まるところ、そういう感情だって自分にとつていいように変化して欲しいと相手を思いやることなんだから

「厄介な考え方だな、と辻霧はぼんやりと思つ。

それなら自分の他人への無関心を貫き通す姿勢は、彼女の目にはどう映るというのだ。

「あたしはそれをちょっと他の人より強く意識して、信条にしてるだけ。だから身近に困つてる人がいたら絶対に見て見ぬ振りはしない。それが自分に与えられた特権で、手が届く範囲でできることができる状況なら自分の限界までやつてみるのが人間つてものだと信じてるから」

「…………」

自分の実力がどうとか、そのリスクがどうとか一々考えているわけではない。ただ、手を伸ばす意志が自分にあるかどうか。明日原にとつて重要なのはその一点に尽きる。

辻霧は黙り込んだまま明日原の言葉を反芻していた。

明日原は胸の内を吐き出してすつきりしたのか、無邪気に辻霧に話しかけた。

「今ので納得できたかしら？」

「…………ああ、一つだけよく分かつた」

「？」

明日原がステーキの最後の一 口を嚥下するのを見届けてから、辻霧は自分の結論を述べた。

「俺は多分、一生お前と相容れない」

明日原がきょとんとした顔をした。

「どういう意味……？」

辻霧は黙つて席を立つとレジに向かつた。明日原も仕方なく後を付いてくる。

会計を済ませてとつぱりと田の暮れた外気の中に出ると、再び明日原が尋ねてきた。

「ねえ、さつきのビーフについて」

「俺はさ」

別人のような声で辻霧は話し始めていた。

「俺はお前みたいに強くないから逃げ続けることしかできないんだよ。思いやるだとか見て見ぬ振りはしないとかさ。他人のために自分の身を削るようなマネをするつていうその精神が理解できない」

明日原の表情は街灯の角度のせいか、よく見えなかつた。

「結局互いの事情にそうやって土足で上がり込んだって必要以上に傷つくような結果しか出ないじゃないか。どいつもこいつも自己中心的な、保守的な考え方しかできないんだつたら、何で俺だけが損しなきゃいけないんだ？」

だから距離を置く。

相手の心の声の射程距離より、一步離れた位置で。

「だからお前が『見て見ぬ振りはしない』なんて綺麗事並べ立てやつてる検査にもこれ以上協力する気はない。結局お前も同じなんだよ。自分の理想を人に押しつけて、それが人を傷つけてるって自覚がないならそんなこと言える義理はないだろ？」

そして、彼女もきっとその事実を、辻霧の心の声を知つて傷ついたに違ひない。人が互いの射程距離に歩み寄つたとき、そこに生まれるのは單なる傷つけ合いだけだ。

明日原は何も言わない。左手の金属バット入りの黒いソフトケースを握りしめ、黙つたまま辻霧の方へ一步踏み込む。

辻霧は動かなかつた。

そして、

殴られた。

金属バットを握った左手じゃない、素手の右手で。

バシッ！ と、小気味良い音が顔の左側から響いたと思つと、辻霧はバランスを崩してそのまま路上に倒れ込んでいた。

辻霧が何か言う前に、明日原の言葉が上から降ってきた。

「何格好つけようとしてんのよ。拗ねたフリしてんじゃないわよ。そんなんできれいに纏まつたと思つてんの？ アンタがどんな辛い経験したかなんて知らないけどね、そんなこと言えるってことはアンタだつてまだどこかでその考え方を信じているつてことでしょ？ それでも諦めずに挑戦する意志がない時点でアンタに逃げる資格はないわよ」

殴られた左頬をなでながら、何でこいつが怒つてんだろうと辻霧はぽんやりと考えていた。

ていうか俺、怒つてた？

「それでもアンタが自分主体の保守的な考え方しかできないんだったら……アンタは獣と同じだ。あたしはアンタを軽蔑する」

相変わらず光の具合で明日原の顔は見えなかつたが、その時雨も降つてないのにぽたつと辻霧の顔の上に何か水滴が落ちてきた。

辻霧がその微かに暖かい液体が何なのかといぶかしむ間もなく、明日原はくるりと身を翻し、

「…………今日は手伝ってくれてありがと。明日からは一人でやるから」

短くそれだけ言つて夜の闇に消えていった。

言つだけ言つて突然怒り出して人を殴った挙げ句支離滅裂なこと言つて泣いて消えやがる。

「…………何なんだよ全く

後に残された辻霧はぼそりと呟くと、口の中に微かに溜まった血の塊をべつと吐き出した。

20分後、辻霧は学区内バスを利用して自分の住んでいる寮に向かっていた。

とにかく早く帰つてユニットバスでビバノンノンしてせつせと寝て今日の出来事を頭の外へ追い出してしまったかった。

明日原の思考回路の一端に触れたことで辻霧のアイデンティティは自分自身で思つていて、以上に搖さぶられていた。

(もうヤダ何なあいつ…………うおおッ！？)

突然辻霧はバランスを崩して転倒し、アスファルトに後頭部をしだたかにぶつけてしまった。一難去つてまた…………といづやつである。(いってえ…………何だつて七月の路上に氷…………が…………？)

氷？

辻霧がそろそろと立ち上がりを見回してみると、夜で温度は若干下がつてゐるとはいえ、夏のアスファルト一面が氷漬けになつていた。

(おこおい何だよこりゃ……)

さらによく見ると、アイスバーンはまるで手負いの獣が何かから逃げようとのたうち回つた跡のように、乱雑でありますながらある一方向へ向かって前進したような痕跡を残している。その先は

(路地裏…………？)

跡を辿つていくにつれ、惨状はさらに激化していた。

(ひつでえ…………)

路地裏の地面一帯が氷漬けになつてゐるかと思えば、壁に張り巡らされたパイプの一部分が急速に冷やされたことで粉々になつたりと、異常な空間が広がつてゐる。

その奥に、何かが倒れてゐるのが見えた。

「…………

はやる動悸を抑えながら、ゆっくりと近づく。

それは

四肢を切断された、鏡大路時奈だった。

「な

よろよろと、辻霧は思わず壁によりかかる。

何がどうなつてゐるのかさっぱり分からぬ。

唐突な日常と非日常の交錯に、キヤパシティを越えた脳のヒューズが飛びそうになつた。

（し、死んでるのか……？）

麻痺したような判断力で辛うじて最初に辻霧が浮かべた疑問はそれだつた。

近付いて紫色に変色した彼女の唇に手をやると、微かに息はある。目を逸らしたいのを堪えて四肢の切断面に目をやると、どうやら切断されたと言うよりは四肢の付け根の部分が強力な冷気によつて壊死し、脆い粘土細工のように取れたというのが妥当だと分かつた。冷たくなつてゐるせいか血行に影響が出ており、それほど出血はしていない。

ふと、今日の明日原の言葉が脳裏によみがえる。

（ちょっと明日原さん気付いちやつたよ）

（……何だよ）

（これひょつとすると被害者は全員自分自身の能力でやられてるん

じゃないかな！？）

（おーすげーよく気付いたなー）

「…………通り魔…………？」

掠れた声が自ずと口から漏れる。

路地のさうに奥に田を凝らすと、取れた手足が順々に転がっていた。

（と…………とにかく、警備員に連絡しないと…………）

今の辻霧に、めんどくさいという思考は残つていなかつた。

通報から約10分ほどで到着した警備員たちは手際よく鏡大路を拾い集めると、彼女を救急隊員に引き渡した。状態があまりに酷く、第七学区のある病院に搬送されるらしい。

それと並行するように第一発見者の辻霧にも事情聴取が行われた。取り調べが全て終わったのは十一時を回る頃で、その間自分が何を喋ったのか辻霧は全く覚えていなかつた。

そして翌朝。

飛行船の大画面では第一八学区通り魔事件における一十一人目の被害者が出たと報道があり、その日の鶴来浦高等学校一年B組の出欠確認では、辻霧のみ返事がなかつた。

第四章 七月十三日 Back-Fire-Level3 .

第四章 七月十三日 Back-Fire-Level3 .

朝起きてからも辻霧は最悪の気分だった。ものすごく気分の悪い夢を見たような気がしたのだが、思い出せない。思い出したくもない。

朝食の準備もせず、アルミパイプ製のありふれたベッドに寄りかかって長いことぼーっとしていた。このまま痛みも感じずに死ねたらどれだけ楽だろう。

明日原に投げつけられた自分のアイデンティティを否定するような言葉と、四肢を切断され青ざめた顔で転がっている鏡大路の姿が頭の中ですっごぐるぐると回り続けていた。

(………… そうだ、病院)

泥沼化した思考の中から気まぐれにすくい上げた行動指針が頭をもたげた。

(鏡大路…………どうなつたんだ……)

起きてからテレビも点けていなかつた辻霧は、その日のニュースすらまだ把握していなかつた。

のろのろと起き上がり、服を選ぶのも面倒だったので制服を着てから上からいつもの紺色の指定セーターを羽織つた。

財布が入っているからという理由で必要もない学生鞄をひとつかみ、鍵もかけずに寮の自室を出していく。その後は自分でもどういう道順を通つたのか分からなかつたが、気が付くと第七学区の鏡大路が収容された病院の前にいた。

受付で面会の申請をして鏡大路の入院している病棟まで階段を使つて行くと、丁度今し方教えてもらつた病室から回診なのか力エル

のよつた顔をした医者が出て行くのが見えた。

カエルが廊下の向こうに消えたのを見届けてからゆっくり病室に入る。

奥の方にカーテンを引かれたベッドがある以外は、他に患者はないようだつた。

喉の奥から掠れたような、ひび割れた声がか細く漏れた。

「鏡大路？」

返事はない。

一つ咳をし、つばを飲み込んで恐る恐るといった調子で病室の中に足を踏み入れる。

一瞬ためらつてからカーテンを引いた。

鏡大路は眠つていた。その顔は苦悶に歪むでもなく、穏やかだつた。そして 肩から先は、点滴に繋がれた腕が、ちゃんと付いていた。

「は

」

安堵の息と共に辻霧は病室の壁にくずおれた。

シーツの盛り上がり方から見ても、どうやら彼女は無事五体満足で生還したようだ。

何だかもう、辻霧は自分が何のためにここまで来たのか分からなくなつていた。無関心な姿勢を貫き通すと言つておきながら、どうして彼女の安否を気遣つたのか。

（ そんなことを言えるつてことはアンタだつてまだどこかでその考え方を信じていらつてことじょ？ ）

自分のことを客観的に見ることができた明日原の方が、的を射ていたのかもしれない。

本当は人間に絶望できてしまった方がずっと楽だと分かっていて。

そうだ。

「立ち向かう」とすらしなかつた俺に、確かに逃げる資格は無いなふ、と辻霧の口元に自嘲するような笑みが浮かんだ。

彼女はきっと今日も無駄なのかそうでないのかよく分からない「捜査」に単身赴くのだろう。自分の中の「信条」を貫き通すために。（もし……放課後に会えたら）
体育座りで腕の中に顔を埋めながら、そつと辻霧は思った。（……謝つてみるか。そんで……）
彼女の中の「人間」つてやつにもう少し希望を持つてやるといつのも、良いかもしねない。

逆浦透通が放課後に従姉の見舞いに病室に立ち寄ると、既にそこには先客がいた。

「…………」

一昨日のスキルアウトによる銀行強盗の時に出会った高校生だ。いつからそこにいたのか、鏡大路の眠つているベッドの横の壁に体育座りでくずおれるようにして、顔を腕の中に埋めている。肩の上下の仕方からしてぐつすり眠り込んでいるようだ。

「今朝からずっとそこにいたみたいだね？」

突然背後から響いた声にビックウツ！ と逆浦が振り返ると、そこにはカエルのような顔をした背の低い医者が立っていた。

「彼女の弟さんかな？」

「あ……いえ、その……従弟です」

「ああ、そうか。とりあえず今は大丈夫だ。発見されたときは状態が酷かつたんだね？」

「…………」

「そこにはいる彼が発見したらしいね？ 後でお礼を言つておくと良いよ？」

「あ、はい……その、時ちゃんを助けて下さつて、ありがとうございました」

いました」

「深々と頭を下げる風紀委員に力エル医者は人の良さそうな笑みで応じると、病室を出ていった。

とりあえず逆浦は眠り込んでいるらしーい辻霧に近寄ると、肩に手を置いて軽く揺さぶつた。

「こんなところで寝てたら風邪引きますよ……」

「ん……ふあ……あ？ お、いつかのショタ男君。ショタ男君じゃあないか」

「ショタ？」

首を傾げる逆浦を尻目に、辻霧は伸びと共に立ち上がった。微かにポキ、と音がする。

「くああ……わり、今何時か分かるか？」

「えーと……三時半くらいですかね」

「え？」

起き抜けのふわふわとした雰囲気から、突然辻霧はがらりと表情を変えた。

「マジかよ……道理で腹減つてると思つたら昼飯食つてなかつたらか……あークソ、ちょっとマック寄つてから行くか……」

がしがしつと頭を搔いて立ち去ろうとする辻霧に、逆浦は咄嗟に声をかけていた。

「あの」

「ん？」

「あー……アレです。その、時ちゃんを発見してくれたのって貴方なんですよね。聞きました。えっと、その節は本当にありがとうございました」

早口でそう言つて頭を下げる逆浦を、まるで珍しいものを見たとでもいう風にしげしげと眺める辻霧。

「お前……」

「はい」

顔を上げた逆浦には、なぜかいつものように無表情な辻霧の顔が、

ちょっとだけ笑っているように見えた。

「……本当にそいつのこと好きなんだな」

「え？ その、え？ え？ すっ、いや、そんな
顔が紅潮するのを止められない逆浦を見ながら、いや一分かりや
すい反応だなーと辻霧は思う。

「あ、そうだ」

ふと思いついて辻霧は病院を出る直前、風紀委員に頼み事をした。

時刻もそろそろ六時を回る頃、明日原早苗は第一八学区の八人目の被害者が出た通り魔事件の現場にいた。

彼女なりに現場視察を行つてみて意義のあつた発見は皆無というわけではなかつた。

例えばレベル3の電撃使いである七人目の被害者の場合、周辺の電線が何本かショートしていたのはともかく、近辺の店舗で取り扱われていた電化製品の類にまで著しく被害が及んでいた。レベル3相当の能力者ならば能力の制御もある程度慣れただと思われるが

（そう……まるで能力が制御を失つて暴走したような……）

犯罪を犯した能力者の収容施設に能力者のAIM拡散力場に干渉し、暴走するようにし向けるAIMジャマーという機材が設置されているという話は聞いたことがある。

（もしかして……通り魔の能力が相手の能力を直接跳ね返すのではなく、相手の能力を暴走させるようにし向ける『人間AIMジャマー』のようなものだとしたら？）

「そこにいるのは誰だ！？」

「ひやひつ！？」

不意に路地の奥から聞こえた誰かの声に、明日原は驚いて飛び上がつた。

振り返つてみると、そこにいたのは自分と同じくらいの年齢の少

年だった。赤いパークーに紺色の野球帽というラフな格好をしている。格好だけ見ると町中で見かけるチンピラのようだが、その顔は普段なら穏和そうな顔立ちだった。ただし今は警戒しているのか眉間に皺を寄せている。

路地の奥からこちらに歩み寄ってきた少年は明日原の姿を認める
と、微妙に表情を和らげた。

「ん…………？ おや、何だ……あの、そこで何をしているん
ですか？」

「あ……えっと、驚かせてしまったようでしょいません。ちょっと通
り魔事件のことが気になつて……自主的に捜査しているのです」

「！ それは奇遇ですね」

少年は完全に明日原に対する警戒を解いたのか、きゅうと目を細
めて人の良さそうな笑みを明日原に向けた。

「僕も自主的に調べているんですよ……この事件」

「本当にですか！？ 似たような行動をしている人がいて嬉しいです」
明日原も少年に対する警戒心を解く。少年は辺りを見回しながら
気遣わしげに言った。

「…………しかしこの時間に女性一人で捜査というのは若干不安で
すね……犯人は現場に戻つて来るもの、とも言いますから……どう
ですか？ 捜査をご一緒させていただいても？ 情報をリーグする
こともできますし」

「あ、よろしくお願ひします」

一つ返事で承諾する明日原。ついでに路地の入り口に置いていた
学生鞄を『強制移動』で手元に引き寄せる。

しかし幸運だ、と明日原は胸中で呟いた。昨日辻霧と言い合つた
ことが一日経つても胸に重くのしかかっていた。単身での捜査に心
細さを感じていた矢先、協力者が見つかるとは。

「今回の事件、割と自力で調べてる人が多いらしいんですよ」

「そうなんですか？」

「はい。そう言えば十一人目以降の現場はまだ警備員が捜査中な

で入れないそうですよ。知り合いで同じく捜査している友人からの情報なんんですけど」

こんな調子で学区内を移動し、九人目の被害者が出て現場に一人は到着した。

路地の奥へと進んでいたとき、ふと少年が後ろから声をかけてきた。

「時にですね」

「はい」

「人が人を傷つけることって避ける方法があるんでしょうかね？」

路地の壁を観察しながら明日原は突然何の話だろう、と首を傾げる。

「それは……人が互いに相手を気遣うことができれば、そういうことは起こらないんじゃないですか？」

「…………まあ、確かにそれがベストアンサーでしょうね。でも実質問題、それは難しい。例えそれが可能であつたとしても、互いに心のどこかで抑圧されるものがあるはずなんです。気を遣うと言つくりいなんですから」

「…………」

「それらは自然現象であり、不可避の現実なんですよ。人と人との接するときに完璧に傷つけ合いを避ける、なんてことはありえない。一人が集団に殴られた場合、殴られた一人が加害者全員を殴り返せば公平かつ穩便に物事が済むわけではない。その一人に全員を殴り返すことによつてかかる労力＝加害者が一人を殴る労力ではないからです。世の中には誕生した時点で確定するヒエラルキーが確かに存在するんですよ。加害者と、被害者に」

「あの…………」

「さて」

少年が、パーカーのポケットから白い粉末の入った小さなケースを取り出した。

その中身を何気ない動作で少年が舐めた瞬間、

ぞわりと、

全身にかつて経験したことの無いほどの不快な感覚が走った。

（犯人は現場に戻つて来るもの、とも言いますから
明日原の額にじつとりと嫌な汗が流れ落ちた。）

「果たしてお前はどうちなんだろうな？」

明日原は路地裏を必死に走っていた。

その後ろをゆっくりと、表情に余裕の色さえ含ませながら、狂気を双眸に宿した少年が歩いてくる。

焦燥しきつた明日原の体のすぐ側に、鉄パイプがガン！・ゴン！・ゾン！・と連続して突き刺さるまるで空間から突然現れたように。

「無駄無駄。俺の『追尾誘爆^{バックファイア}』は相手のAIM拡散力場に干渉して強制的に相手の能力を相手の意志とは無関係に暴走させる。表向き身体検査ではAIMサーチ系の能力だと思われてるんだけどなア」
雑草を巻るような適当な感覚で明日原のAIMを搔き乱す。暴走した能力によつて、今度はアルミ製のゴミ箱が明日原の頭上数センチの壁にめり込み、粉碎した。

「実際半径40メートル以内なら補足した能力者のAIMを感知できるから、逃げても意味ねーよ。範囲内なら好きなように暴走させられるし、な」

その言葉と同時に近くのビルの壁が一箇所まるまる消失し、明日原の走つていたルートを吹き飛ばした。

「…………ッ！！」

衝撃で明日原の身体は路地に転がされ、一度二度と地面に叩きつけられる。

這いするよにして起き上がつたが、目の前は袋小路だった。
逃げ場はない。

背後から嘲るよつな『追尾誘爆』の声が響いた。

「ハハツ、昨日の予行演習はどうやらやり損ねたらしいからよ……

大丈夫だつて」

「…………！」

「今度こそきつちり楽にしてやる」

『追尾誘爆』が明日原ににじり寄つた、その瞬間、フツ、と。

『追尾誘爆』と明日原の間に、一辺三センチ程度の黒い立方体が何の前触れもなく出現した。

「？」

呆気に取られる一人の前で、突然その立方体は凄まじい速度で膨張し、『追尾誘爆』と明日原を隔てる二メートルもの壁になつた。そして明日原にとつて聞き覚えのあるその声は上から降つてきた。

「はー、ショタ男君に感謝だな。八人目の現場からずつと後つけて正解だつた」

彼女が咄嗟に名前を呼んだのも無理はない。

「辻霧！？」

「よつ」

辻霧単は、唐突に出現した壁の上に腰掛けていた。

「アンタ、何で……」

「ああ、気にすんな。ちょっとした発想の転換だ」

適当に返事をして手を振ると、辻霧は『追尾誘爆』に視線をやつた。

「『補足した相手のAIM拡散力場に干渉して能力を膨張、暴走し、

自爆させることができる能力』、ね。レベルもそこそこあるんだろ
うが
　　今のお前の行動を見てて分かったことが三つある
「なん
　　？」

「一つ。視覚的な障害物は『追尾誘爆』の発動を妨げる
まるでカードゲームの説明書きを読み上げるかのよう。」
　　淡々と辻霧は事実を述べていった。

「二つ。最低でも咄嗟には『追尾誘爆』は複数の能力に対して発動
できない」

「あ……」

「つまり、だ」

辻霧が壁を蹴つて明日原の側の地面に降り立つと同時に、その材
質の不明瞭な壁は現出した時とは逆に一気に収縮し、忽然と姿を消
した。

そして彼は『追尾誘爆』の方を振り返りながら、
ぼそりとチェックメイトを宣言した。

「二人掛けに對してお前は無力つてことなんだよ」

「くッ…………ハハッ…………つナメてんじやねエぞおおおおおお
おおおおオオオオオオオつ…………！」

『追尾誘爆』の咆哮に呼応するかのように辺りの空気がざわりと
泡立つ。

AIM拡散力場の爆発的な膨張。

視覚的な壁が取り払われたことによつて、明日原の能力は再び暴
走を始めた。路地裏にあつたダストボックスがコンクリートの壁に
めり込み、千切れ飛んだ鉄パイプが何らかのオブジェの如く地面に
何十本と突き刺さる。

「二人掛けに對して無力だア！？　なもんそつちの女の能力でテ

さっきの操作を微風とするなら今は嵐。

数段破壊力が増してしまった。

だがその渦中にあっても辻霧は顔色一つ變えることなく、そこに立っていた。

いつもの様に、めんどくさそうにそこには立っていた。

「まあ人の話は最後まで聞けって……」

滝息を吐きながら辺霧は若干乱れたほ

て撞した

三

自分自身の身体を拘束するかのように、先程の壁と同じ正体不明の物体が四つ、今にも膨張しようと自分の周りに浮かんでいることに。

「『追尾誘爆』は能力を把握できていない相手のAIM拡散力場に干渉することはできない」

その言葉が引き金だつた。

バオツ！！
と。

配置された四つの物体が膨張し、罪人の亡骸を包み込む棺の様な箱を形成し、『追尾誘爆』を完全に拘束した。

箱には文字通り蟻の子一匹通す隙間も無い。

それと同時に路地裏一帯を抉り、バラバラにしていた能力の奔流もぴたりと止まった。

明日原がその場でぺたりとへたり込んだその時、拘束された箱そのものが振動するほどの絶叫が箱の内側から轟いた。何度も箱に対して内側から攻撃が加えられているようだ。

それに対してもえ辻霧はめんどくさそうに応対した。

「わり。言い忘れてたけど、その箱に対して三次元上の物理的な干渉は意味無いから」

それを聞いて『追尾誘爆』は大人しくなった。彼は完全に詰んだ状態でかえつて冷静になつた状態で思考する。

（クツソオ……訳が分からねー……何なんだこの能力……精々 A.I M のデカさでサーチぐらいはできるが……本質が分からぬことは暴発させることもできねー）

そこで彼ははたと思い当たつた。

（！ 待て……そ、そーいや聞いたことがあんぞ……学園都市最強に次ぐ第二位の超能力者にこの世の物理法則を無視した『ターケマタ未元物質』つて能力を操る垣根かきねつてヤローがいること……ま、まさか……）

「テメーまさか……学園都市第二位の」

「あーごめん。それ多分人違いだ」

ひらひらーと片手を振つて軽い調子で答える辻霧。さつきからシヨツクでぼうつとしていた明日原は、その時になつてようやく言葉を発した。

「ちょ、ちょっと待つてよ。じゃあアンタの能力つて一体……」

「『オーバーディメンション幻影燈機』」

初めて、辻霧は自分の能力の名を口にした。

「それが俺の能力だよ。多次元に存在する物体の『影』とも呼ぶべきものを三次元上の空間に投影する。つっても俺が『^{パーソナルリアリティ}自分だけの現実』で把握できるのは一→四次元まで、だけね」

例えば四次元を三次元の物体、三次元を三次元上における一次元光源を当てた場合、無論物体に対応できる影は一つ。これが通常要するに影、に対応させるとする。この状態で一つの光源を当てた場合、無論物体に対応できる影は一つ。これが通常の状態。

だが辻霧の能力は、正規のその光源とは別の光源を作り出し、新たな影を、それも別の角度からの影を投影する。言い換えれば三次元の空間上に実在しない物質・物体がある物体を基点に新たに作り出す能力。

「…………つつても説明してる俺自身いまいちよく分かんないんだけどさ」

「そ、そんなの」

「最強じゃないか。」

明日原と『追尾誘爆』は同時に同じことを思つた。

自分達が目にしているのは、もしかすると学園都市最強の七人に次ぐ『第八位』になり得る人間ではないのか？ と。

「まー俺はこの上を目指す気は毛頭無い」

「な、何で！？」

唐突にその幻想をぶち壊す言葉に思わず明日原が叫ぶと、辻霧は顔をしかめた。

「いやさ、それ『記録術』の筋垣にも云われたけど面倒くさいじゃん。レベル5とか。なんか『^{アクセラレータ}一方通行』とかいう学園都市最強も不良に襲われたりとか日常茶飯事らしいし」

「で、でも……」

「捨てられた子猫何で拾つちゃいけないのおかーさん」とすがる小学生のような目で明日原が名残惜しげに言つたが、辻霧も辻霧で「うちのアパートはペット厳禁です」と諭す厳格な母親よろしく取り合わなかつた。

「だーから人に能力のこと話すの嫌なんだって……たまにお前みたいのがいるから……」

がしがしと頭を搔き始めたとこりで、「お、そうだ」と何か思い付く。

「この際だしお前ら一人とも纏めて口封じしちまおいつ。つんそりしよ」

「ええええええええええつー?」

さつきから拘束されたまま口をつぐんでいる『追尾誘爆』はともかく、明日原が悲鳴を上げた。

「そ、そ、そ、そーんなこと言つたって、能力のこと自分からべらべらしゃべったのはアンタでしょーー!?

「な理屈持ち出されても聞かれちゃつたものは仕方が無い」

にべもない。

おもむろにポケットに手を入れて何か取り出そうとする辻霧。

これは死ぬ覚悟でもレベル2の自分が立ち向かうこともやむなし……と戦々恐々としていた明日原の予想に反し、辻霧が握っていたのはじく普通の携帯電話だった。

そしてどこかに電話をかけると、

「もしもーし風紀委員ですかー? 第一八学区ファミレス『トイコントテンポラリー』の裏で通り魔捕まえましたー。え? あ、いや本当ですって。ああ匿名でお願いしゃつす。ハイ」

普通に通報していた。

がくーっと力が抜ける明日原。だがすぐに「じゃあ自分はどうなるんだ?」という根本的な問題に気付く。

がばつと顔を上げて問いただそうとすると、すでに辻霧は別なとこに電話をかけているようだった。何やら熱心に話し込みながら明日原に手招きで路地の外に出ようと言つてはいる。警備員が来たら面倒だからだろ?つか。

四次元の棺に捕らわれたままの『追尾誘爆』を時折振り返りながら、明日原は辻霧に着いていった。会話が断片的に耳に届いてくる。

「だからさ……そこは聞かなくて良いって……うん、そう……ん？」

「ああ、今度面白いもの見せてやるから」

何の話だ。

大通りに出てから明日原は気になっていたことを尋ねた。
「アイツあのままにして出て行って良かったの？ 三次元の物理法則は通用しないって……」

通話を終えて携帯をポケットに収めながら辻霧は何でもなぞうに答えた。

「ああ、それなら大丈夫。俺の力場が離れて二十分くらいしたら自然に消滅するから。それまでには近場の警備員が到着してるだろ」
それより、と辻霧は前置きした。

「お前の処遇が決定した」

ドキリ、と。

明日原のこめかみに嫌な汗が流れる。

「…………」

重々しく、辻霧が口を開く。

「…………」

「お前を来週から』一週間繚乱家政女学校調達のメイドコスプレで俺の家事全般を押しつけられるの刑』に処す」

「…………は？」

「何か聞き間違ったのかもしれない。」

「も、もう一回お願ひします」

「え？ だから『一週間繚乱家政女学校調達のメイドコスプレで俺の家事全般を押しつけられるの刑』だつてば『一言一句間違いなく完璧にリピートされた。』

完全に訳が分からぬ。」

「そ、でも、それ、ば」

「あー心配しなくてもいい。メイド服に関しては燎乱家政女学校のコネから確保済みだから」

論点が完璧にズレている気がする。というかそれ以前に見過ぎてしまっている問題が大量にあるような気がする。

「なん、いや、そん」

さつきから混乱のしつぱなしで拳動のおかしい明日原に対して辻霧は急に深刻そうな表情になつた。

ああ、そりが通帳費用が必要だ……ううかは一週間自腹は時々の学生のお財布事情には非情すぎる現実だしな……あ、なんだつたら住み込みでも」

卷之三

明日原が吼えると同時に辻霧の身体は鮮血と共に夕焼けの空にか
つ飛んでいった。それはそれは見事なホームランだった。

終章 後日 Hope—To—Relation .

終章 後日 Hope—To—Relation .

「とりあえず一件落着、か」

七月十四日 p . m . 5時37分、第七学区のとある大能力者が眠る病室。

彼女の従弟である逆浦透通は風紀委員本部の報告にほつと一息吐いた。昨晩突然連續通り魔事件の犯人が確保されたという一報が入り、慌ただしく唐突な事件解決後の情報処理や書類の作成といった残業をこなしてから三時間程度しか寝ていなかつた。

第七学区から出張つて來ていたという通り魔はその日の内に同学区の警備員に身柄を引き渡されたらしい。

これで全ての事件が解決し、第十八学区にも平穏が訪れた、と大半の風紀委員や警備員が胸を撫で下ろした。

だが、逆浦には一つだけどうしても腑に落ちない部分がある。
(あの通り魔)

三日前に起きた大規模かつ組織的な銀行強盗。アレだけの重装備の上に人員を割き、リスクを負つたにしてはあまりに成功した際の代価が少ない。それに関し特に言及はされていなかつたが、気になつていた逆浦はある一つの推測の下に後日自主的な捜査を行つた。

(同日に何者かが再び第一八学区のデータベースに侵入していた)

その結果は、彼の推測とほぼ一致していた。前回の侵入で風紀委員の情報に対するセキュリティがより堅くなつたであろう事を見越して、銀行強盗という囮に皆の目が向いている隙に侵入した

少し突飛な考えかもしれない。そうなると三日前の銀行強盗を首謀、もしくは誘発した者が別にいるという事になる。

しかし更に彼の不信感を高めたのはその侵入した痕跡だ。データベースをクラックした時刻は七月十一日 p . m . 6 時 48 分。そして事情聴取の記録を見る限り、その時に通り魔はまだ学区間を行き来するリニアモーターラインの車内にいた。その際ネットワークに接続できるような端末やデバイスは所持していない。つまり彼が『バイロケーター 分身能力者』でもない限りは同時にクラッキングは不可能である。

もしも。

もし、そういう情報を探して、第三者に提供している人物が通り魔とは別にいたとしたら？

あくまで可能性の話だ。だが彼にはどうしてもそれが真実に思えてならない。

常に学生による少年犯罪の第一線に身を置かなければならぬ風紀委員である以上、いざれは彼もその学園に潜む暗部と闘わなければならぬ日が来るのかもしれない。

しかし、とりあえず今だけは。

今だけは、ようやく戻ってきた平穡を過ぐして、逆浦は切に願つた。

「彼女、回復はどうやら順調のようだね？ この分だと今週中には意識が戻るかもしれないよ？」

何より、今日病院を訪れたときに玄関で今しお自分が担当した患者を見送つたらしきカエル顔の医者が自分にかけてくれた言葉だけでも十分な救いになつた。

穏やかな表情で眠る従姉の顔を眺めながら、逆浦はあの色の薄い高校生のことを思い出していた。

あの日、病室から立ち去る間際に彼は突然「通り魔事件のデータをプリントアウトしてもらえないか」と尋ねてきたのだ。不用意な情報開示は風紀委員としてもあまり賢明な行動とはいえなかつたのだろうが、あの時は逆浦もなぜそんなものが必要なのだろうかと訝つたものの、鏡大路を助けてくれた恩もあるだろうからとその場で

渡したのだった。

そしてそれから約四時間後に通り魔事件は急転直下の解決を迎えることになる。

（安直すぎる考え方かもしれないけど

）

否が応にもこの二つの出来事の間にぼんやりとした繋がりを見てしまう逆説だった。

．．．．．と。」それで一応完結です

最後まで読んで下さった方はありがとうございました

さりげに続きを暗示させるような終わり方ですが続編も視野に入れて書いてたみたいで、手元に中途半端なところまで書き上げた続編が一応あります。魔術サイド絡んできます

コレに関しては本作の反応の方を見て続きを書いて投稿するか否かを決めたいなー．．．と

こんな作品でも感想質問批判等くださつたら大変嬉しく思います
願わくは本作のキャラ達が読者の方々の印象に残ればなあ．．．と
か思つたり；

それでは（．．．）ノシ

辻霧单

> i10211-1467 <

本作主人公。第七学区鶴来浦高等学校一年。

細い華奢なシルエットにぼさつとした頭が特徴。全体的に色素の薄い体をしている。

面倒臭がりで大抵のことには興味を示さないドライな性格。人付き合いが苦手で身近な人がトラブルに巻き込まれてもまず自分から動くことはない。日常を「自分自身をより大衆に埋没させるために必要なルーチンワーク」としてとらえており、人間関係も極力付かず離れずといったものを構築しようとしている。

実はその気になれば第八位のレベル5になれるほどの能力を秘めているが、本人が向上に対しても前向きな姿勢を持たないため能力開発は停滞。滅多に人に能力を見せることもない。

能力は『オーバーディメンションシステムスキャン』による判定はレベル4。次元の透過率を操作し、「幻影」を三次元上に投影する能力。簡単に例えるなら物体に通常存在しないはずの別の角度からの照明を当て、本来とは違つたもう一つの影を生み出すようなもの。「幻影」はあくまで多次元上の物体の影なので、三次元上の物体はこれに干渉できない。

また辻霧が「自分だけの現実」によって掌握できているのは一~四次元までであり、それ以上の多次元空間への干渉は能力の暴走、ひいては辻霧本人の脳のキャパシティを越えパンクさせてしまう恐れがあり、辻霧がレベル4止まりであるのはこれに起因しているとも言える。

メイド萌え疑惑がある。繚乱家政女学校にコネがあるなど、謎な面が多い。

明日原早苗

> i 10212-1467 <

お節介な性格の鶴来浦高等学校在籍の女学生。レベル2の異能力者。ソフトボール部所属。

行動理念の根底に強力な好奇心があり、あらゆる物事に対しても研究熱心である。対照的に自分自身のことに関してはあまり興味がないらしい。

とある出来事から偶然辻霧の能力を知ってしまい、当然ながら興味を示す。彼の「パーソナルリアリティ自分だけの現実」が四次元までしか対応できないことを知った上で、彼に十一次元の理論構築について教えようとしつこく付き纏う。

能力は『アボーテーション強制移動』。十一次元上の自身の絶対座標を基点として物体を自身の元へと瞬間移動させる能力。

他の瞬間移動能力者に違わず十一次元上の論理を応用した能力だが、未だに自分自身の座標を基点としなければ能力を扱えないためレベル2止まり。身体検査では毎回『エクスペクタブル発展途上』と評される。

『バックファイア追尾誘爆事件』で辻霧に借りができる、あることを命じられてしまう。

逆浦透通

第一八学区手親女中等教育学園の学生。レベル1の『ジャミングヘルツ妨害聴覚』

で風紀委員。気弱そうな外見で、歳の割に童顔な為かよく女子に間違えられる。

強い意志を持つ大能力者である従姉の鏡大路に憧れを抱いており、脆弱な自分ことを卑下する傾向が強い。

鏡大路蒔奈

> i 10213-1467 <

逆浦の従姉。常盤台中学の三年生にしてレベル4の大能力者。

辻霧の能力を知る数少ない人間の一人。

ポニー・テールの似合うクールビューティー。冷然とした外見に加え、男勝りな言動が目立つ一匹狼な性格。学校ではどこの派閥にも属さず大抵は独りで行動している。

全体的に上記のような威圧感に満ちた印象を周囲に与えている傾向があるが根は優しい。逆浦を実の弟のように思つており、彼に対する本人の自覚以上に甲斐甲斐しく豆に世話を焼いている。意外に寂しがり屋な一面も。

能力は『通行止め』^{アブソリュートゼロ}。触れた物体の質量、体積に関わらずその運動状態を「静止」にする事ができる能力。音速を超える速度で発射された弾頭ミサイルを片手で受け止めたり、摄氏三千度の鉄塊の気体分子の運動を静止させて氷漬けにしたりなど、能力の汎用性は高い。

追尾誘爆

第一ハ学区連続通り魔事件の犯人。

能力はレベル3の『追尾誘爆』。相手のAIM拡散力場に干渉して能力を膨張、暴走し、自爆させることができる。

自分の能力で次々と高位能力者を襲撃、自爆させていた。

第一章 八月十五日 Diamond-Cutter-Level
3.

路地の中程で苛立たしげに舌打ちすると、新河幅揮はぼそりと呟いた。

「チツ士御門の野郎、なーにが『健闘を祈るにやー』だあのエセ高知人め。結局まともな情報はほとんどねーだろうがクソッタレ。よほど一遍細切れにして欲しいと見える」

その言葉は目の前にいる青年に對してと、『うより、どちらかといえば独り言に近い』ユアンスだった。

青年は　　この現代科学を軽々と超越したちょっとした近未来SF世界である学園都市に、おおよそ全く似つかわしくない格好をしていた。180センチを越える長身に薄茶色に染めた雑草のよう無造作なヘアスタイル。ゴシックなデザインのシルバーピアスが片耳に幾つも余分な穴を空けている。左目の下に涙のモチーフなのか、青色の滴の形をした刺青が入っていた。近代ヨーロッパを思わせるチェック柄のシックなマントに、止めとばかりにベルトの左側には装飾的な意匠のショートソードがぶら下がっていた。その辺りを歩いているだけで職務質問を受けそうだ。

青年は新河の独り言を聞いて意味を理解したのか、気遣わしげに声をかけた。

「内憂外患激しいところ悪いが、土御門元春を知っているのか」

「あア？ そういうお前はどうなんだヨ」

「…………それを知るも知らぬも貴様にとつては大同小異であろう」「気に入らねーなあオマエ。大方潜入前にイギリス清教に関しては

大ざっぱに下調べ付けといったんだろオが

敵意を隠そうともせずに青年を睨め付ける新河に対し、青年はあくまで自然体を貫き通していた。

「事実無根、だな。まあそのような枝葉末節な物事は捨て置け。土御門の仲間とするなら貴様、アレイスターの犬か」

「一々物言いが気に食わねえんだテメーはヨ。それに犬なんて大したもんじゃねーし」

新河は自嘲氣味に言い切つた。

「良くてネズミが精々だろ。大衆的にはスペイって方がウケが良いみたいだが」

「蛇足かもしけんが言葉の取捨選択は大事だぞ。まあ貴様のそれもまた一興だが」

「ハア……ぐちゃぐちゃした能書きはそろそろいい加減にしてさつさとやらせりつつのヴァーダント＝ブレイドアクト」

青年 ヴァーダントは意外そうに眉をひそめた。

「ほつ、油断大敵、だな。そこまで早く情報が回っているとは……まあ些末な問題に過ぎないか」

「言葉の取捨選択すべきなのはどつちだつ一つ話だヨ。『不言実行』

つづ一言葉を知らねーのか

「その引用、間違つてるぞ」

「ファック」

特に興味も無さそうに言つと、新河は着ていたシャツの袖を二の腕まで捲り上げた。生白い腕が露わになると同時に、準備運動のように右手の指をパキッと鳴らしてみせる。

その右腕を無造作に手近なコンクリートの電信柱に叩きつけた。

「ゴツー！」 という轟音と共に、電信柱は爪楊枝のように簡単に折れて砕けた。

ヴァーダントは折れた電信柱が自分の真横に倒れ込んでびくりとも動かなかつた。冷静にその場を観察している。

この破壊力こそが新河を**強能力者**たらしめる能力、『**ダイヤモンドカッター**』^{レベル3}。

要は物体にかかる圧力をその面積や仕事量、重力加速度を無視して自在に操ることができの能力。その応用によつてはダイヤモンドさえ切断可能な鋭さを手に入れることが可能だという。

「…………魔術師が無理に能力開発を行うと肉体に必要以上の負荷がかかると聞き及んでいるが」

「御心配どーオも。オレは土御門と違つてハナツから科学サイドの人間だからナ。魔術なんて裏ワザの類は一、三ハナシに聞き及んだ程度の知識しかねーヨ。」

首をコキッと鳴らしながら氣怠げにそつと言つた新河は次の瞬間、ダンツ！！と地を蹴り、一息でヴァーダントの懷に飛び込んだ。

「で？ テメーの心配はどうしたヨ？」

引き裂くような笑みと共に小指から肘までのラインに圧力を集中、分厚いタングステンの塊さえも易々とセロファンのように切り裂く鋭さを得た左腕が咄嗟に構えられたショートソード^{じゅうち側}と青年を寸断する

その、直前だった。

唐突に眼前のショートソードから異様な威圧感を直感的に感じ取つた新河は、圧力を踏み出した右足の踵に集中させ、即席のスパイクで慣性を強引に抑え込んでザジジッ！！と無理矢理後方に跳んだ。アスファルトに彼女の跳んだ軌跡を追うように一直線の溝が抉り取られる。

着地した新河が訝しげに自分の左腕を見ると、丁度手首より数センチ下の位置に横一文字の傷があつた。いつの間に、いや、そもそもどうやって斬られたのか。

「奇怪千万、といった表情だな」

極限まで研ぎ澄まされた圧力の鎧を破り、一太刀でそれを傷つけた男は、つまらなそうに呟いた。

「ふん、こんなものか。上半身を両断するつもりだったんだが。まあ丁度そちらから手を出してきたところだしだ……」

ゆつくりと、ヴァーダントは右手に構えた刃も切つ先もない奇妙な形の装飾的なショートソードを新河に突きつけ、不適な笑みを浮かべた。

「正当防衛、だろう？ 一度口に誇つて意味を問おう Superb idea 912といつ名を覚えておけ。冥土の土産といつやつだ」

「ほざけ。カツコイー台詞の途中悪いがくたばんのはテメーだボケ」ボキボキッと『極限研磨』の調子を確かめるように腕を鳴らす新河。そのまま一気に身を落とすと、再びキュガツ！！と地を蹴る。今度はスパイクを利用した稻妻の形のような変則的な軌跡と共に、高速の両腕がヴァーダントの腰の位置を執念深い猛禽類のように狙つた。

それをマントを翻し、軽くいなしつつヴァーダントは言つ。

「現実問題、カーテナ＝オリジナルを手に取る意志が女王に無い以上、イギリスの国際的地位はこの先も確実に蔑ろにされていくだろう。ならば微力としても我々には『アレ』が必要なのだよ」

「言葉の……取捨ッ……選択は……ジオしたあああアアアアア

つ……！」

どれだけ速く動いても、

「ならばアレイスター個人の野望と国一つ……比べるまでもない。どちらにしろ彼がダメ元で適当に立てた計画の残骸だ」

どれだけこの両手が鋭くても、

「ヤツが浅ましく喰い散らかした残飯を漁るようで虫酸が走るがな……だが臥薪嘗胆もまた一興。貴様程度の障害……苦戦しているようでは國に面目が立たんのだよ」

追いつけない。

ヴァーダントは受け太刀すらしなかつた。新河を上回るスピードと身体速度で彼女の斬撃を躱し、あの妙なショートソードで確実に反撃する。戦闘のあまりの速さに一人の動きを追うように血風が飛

んだ。

「胆大心小すべきはこの剣のみと思われていたようで誠に心外だな。オリジナルの一割の力さえ持たないといつのに」

「何の……ハナシだ……」

「ドパンッ！ ！ とコンクリートを粉碎し、一旦互いに距離を取つた二人の姿はまるで正反対だった。マントに汚れさえ付いておらず悠然と直立するヴァーダントに対し、新河は両腕の細かい切り傷から血を流し、荒い息と共に腰を屈めて何とか立つてゐる状態だ。『カーテナ、』という英國の宝剣にはな、次元を切断するという面白い術式が組み込まれている。私の手元にある、このカーテナ＝レプリカはその術式構成に必要な装飾、魔術的な記号を九分九厘再現したものだ」

青年はその身長に対し不自然なほど短いショートソードの刀身の側面を、すっと指の腹で撫でた。

「だが所詮はレプリカ。オリジナルが遠く及ばぬ贋作に『えた力はあくまで『次元を切断するだけ』に止まつた まあ単

純明快に言い表すなら『何でも斬れる剣』と言つたところか」

そう、彼が行つてゐるのは『何でも斬る』という、ただそれだけ。だがそれだけが科学サイドと魔術サイドの境目に触れるスパイとして特殊な訓練を積んできた新河を圧倒するファクターとはなり得ない。

「私は元英國騎士団所属でね」

新河が痛みとダメージに耐えかねて片膝を付くのを見ながら、魔術師はのんびりと過去を語る。

「点滴穿石を覚えなかつたんだろうね。十歳の時入団して二年で『必要悪の教会』^{ネセカリウス}に逃げ込んだ。従騎士^{エスクワイヤ}にすらなる前だ。故に中途半端に騎士団の術式とイギリス清教の魔術を扱える。君は例え私に敗北し、片膝を付いたとしても何も恥じることはないのだよ……君は敗北すべくして敗北したのだから」

最早新河には言い返す気力もない。血塗れの腕を地面に付きなが

らも、凶悪な表情で元騎士に問つた。

「よお……クソッタレ……何なんだよテメーの目的は」

ヴァーダントは僅かに不快そうな表情でそれに応じた。

「……問われたことに対しても卑怯な返答を寄越すことを許せ。これから答えることはそのプロセスに過ぎない」

そして、ヴァーダントは、一言だけこう答えた。

「『原石』だよ」

一応上げてみました。第一話です。

正直イギリス清教とか騎士団に関しては知識が . . . 曖昧でして . . .
. . . 色々と間違っているかもしれませんが大目に見て下さい ;
シリーズにおいて科学と魔術が初めて交差する第一話、最後までお
付き合い頂けると嬉しいです。

第二章 八月十六日 After/Before_The_Trouble

第二章 八月十六日 After/Before_The_Trouble .

めんどくさいことになつたな、と辻霧^{つじぎ}單^{じたん}はぼんやりと感じていた。すつかり夏休みムードに突入した学園都市は、虚空爆破事件^{クラビートン}だと原因不明の大停電だと廢ビル倒壊事故だとまあ相変わらず色々と物騒ではあつたものの本日は実に平和で、雲一つ無い晴天の下、宿題のことを頭から追い出した学生達で賑わつっていた。

第一八学区を恐慌に陥れた追尾誘爆事件から一ヶ月。喉元過ぎれば何とやらというが、過ぎるスピードが常人離れしているのだとしか思えない明日原早苗^{あすはな}は、キザっぽい赤いフレームの眼鏡をくいつと押し上げると教卓越しに振り返つた。

「……つまりは p 軸における座標 $x (a_1, b_1, c_1, \dots, n_1, o_1, p_1)$ と $y (a_2, b_2, c_2, \dots, n_2, o_2, p_2)$ 間において三次元上の空間という概念が限りなくゼロに近いという定理に関しては、先程説明した『直角の極限値^{マキシマムライ}』の表で証明した通りであります分かりましたか辻霧クン！」

欠伸^{くいん}が出た。

本日の明日原は年中ジャージで通している彼女にしては珍しく半袖のブラウスに学校指定の紺色のプリーツスカートを穿いている。辻霧は何となく明日原の二一ハイソックスとスカートの裾の間から僅かに覗いている生白い足に視線をやりながら、

「そういえばお前眼鏡なんかかけてたっけ？」
「ダ・テ・よ」

明日原はそう言つと腰に手を当てて再び眼鏡のブリッジを中指と

薬指でくいつと押し上げた。気に入ってる動作のようだが普段のバイオレンスな彼女をある程度見知っている辻霧にしてみれば「似合つていい」という感想を言つては若干良心が痛むというのが正直なところだった。

「その様子だとまた聞いてなかつたみたいね……どこから?」「えーと『ハイまず好きなところ座つて』とか何とか言つてたような覚えがあるな」

「それって教室入つたところからだろーが」

そうは言われても時刻はすでに○・三・一時20分をまわつていい。エアコンがガンガン効いている空き教室で耳の中を右から左へ抜けていく明日原の講義に比べれば、扇風機一台常備の寮の自室で聞こえてくるアブラザミの鳴き声の方が余程意味を為している気がする。

「アンタの寮つてエアコン無かつたっけ?」

「あるけど電気代が勿体なーーーの」

ひんやりとした机の上に頬を押しつけながら辻霧がぼやくと、明日原は溜息を吐いた。

何がどうしてこの状況に到つたのかといふと原因は一ヶ月前事件に遡る。第一八学区内で多発した能力者による通り魔事件に(主に明日原のせいで)巻き込まれた辻霧は(不本意ながら)一連の事件の犯人を流れで叩きのめしてしまい、それによつてこの口やかましいお節介な少女に今まで隠していた能力をバラす羽目になつてしまつたのである。口止めのために一週間の「罰ゲーム」を与えたまでは良かつたものの、罰ゲーム後「誰かにバラさなければ良いわけであつてこれ以上関わらないとは一言も言つてない」という理屈だから屁理屈だか分からぬ論法に圧され、こうして「レベル5になつたアンタの能力を見てみたい」とかいう非常に個人的な理由で恒常的にお節介な能力開発の講義を受けさせられているのだった。

もういつそ「罰ゲーム」中に撮つた写真でも流出させてやろうかとプラフばかりに脅しをちらつかせたこともあつたが、「アンタがひ

ねくれてんのは分かつてるけど嘘は吐かないとて事も充分分かつて
るから」とキシリートール10%入りくらいの爽やかな笑顔でそう返
された。そこまで良心に訴えかけてくるといぐら辻霧と言えども流
石に何も言えない。

眼鏡を外し、胸ポケットにしまいながら明日原は言う。

「別に損してるわけじゃないんだから良いでしょ。丁度次の試験の範囲とも被つててしかも能力開発も向上するつてんだから一石二鳥じゃない」

「なーにが『石』鳥だよ。前も言つたけど俺ほいの上を指す気は毛頭無いの。別に落ちなきや良いんだから向でこの上をわざわざ指さなきやならんわけ?」

それ抜きに考へてもアンタの成績が悪いのは事実じゃないの
ぐ、と辻霧は言葉に詰まつた。

確かにここ最近の辻霧の試験の成績はぱつとしない。特に記録術^{かいじゆつ}は本人のレベルが高いにも関わらず前向きな姿勢が見られないため停滞しているという状況である。

「目線を縦横無尽に駆け回らせながら辻霧はろれつの回らない舌で「べ、べべべ別に良いんだよ。そ、その、アレ、他の教科でカバーするし」

「はあ……前定期末考査十三教科合計順位240人中231位の人が何を仰いますやら」

が何をひくかわから

「はあああああああッ！？ お前何でそんなこと知つてんだよ！？
部屋掃除まで人に押しつけたのはアンタでしょ。床にくしゃくし
やに丸まつてるから何だろうなーと思つたら……ねえ」

「ねえ』しゃねーよ! あ、お前やれと』にせよ、『……」「ひらへん」

明日原が胸ポケットから取り出してかざして見せたそれは、紛れもなく以前始末したはずの辻霧の前期成績表だった。

「ねえ、なん、それ」

「ど、どーーー」と。アンタがやる気出でないんなら明日原さんもちよーっと帰れるといろが無くもないかなーとこつ感じだ」

暴挙だ

あまりの出来事に辻霧が絶句してしる
ながら、明日原は腕時計を確認

「まー若干くだつてきたし、時間も時間だから今田まーの辺でお開きね……教室でやれば良いつてもんでもないみたい」

形から入るのをうそ物ねーなどとふーふー良いながら帰り支度をし、「それじや」と軽く手を振つて明日原が教室を出よつゝある瞬間を辻霧は見逃さなかつた。

明日原のブラウスの胸ポケットから飛び出している自分の成績表に
しか向いていなかつた。

物の細かいことは飛び出でた辻霧 何事かと明日原が振り返ると
るも、辻霧の視界には入らない。彼の視線は直指す一点

出来るか？　出来る。やつてみせる。人間火事場の何とやらとは言つたもので、辻霧の伸ばした手は針穴を突くかの如き精度で成績表に向かつていた。

た
た
一
二

ただ一つ、彼に誤算があつたとすれば、それはあまりの集中力に周りが見えていなかつたことだらう。

辻霧は猛然と机の脚に足を取られて前のめりにすつ転んだ。

そして、伸はした彼の手は勢い余て別のものを驚きにしています。

111

恐る恐る辻霧が顔を上げてみると、信じたくなかった最悪の光景があつた。視覚情報に裏付けられるより先に触覚がその柔らかさを伝えていたにも関わらず。

もの凄一く嫌な空気が一瞬にして二人の間で爆発的に膨張した。

ああ、えっと、その、何だ。こうこう時なんて言えば良いんだっけ？

よつやつと引きつった表情で辻霧は感想を述べた。

「……け、結構でかいんですね」

笑顔のまま、明日原の左手が金属バットに伸びた。

「……やり過ぎた」

「……、」

「……『めんつて』」

「……、」

「……、」

「……、」

「……、」

「……、」

「……、」

「え？」

「……ハンバーガー奢つて」

「……えー……」

「……いいか？ お前、窃盗罪でも成立すりや懲役五十年か五百円以下の罰金だろ。万引きすら年十万円のところをハンバーガー一個で殺人未遂キャラにしてやろうとしてんだから大特価じゃねーか」

拳大の瘤を押さえながら若干涙目で辻霧は屁理屈を吐いた。

金属バットという単価約五千円で手に入るお手軽鈍器による殺人ショ一に今回ばかりは明日原も少し反省しているのか、「じゃあちよつと待つてて」と大人しく最寄りのハンバーガーショップに走つていった。

呻き声を上げながら駅近くのベンチに辻霧は仰向けに寝転がった。

「ちつくしょ……バカバカ殴りやがつて……」

家庭科室の冷凍室から押借りてきた即席の氷嚢を額の上に乗せながら辻霧がブツクサ言つてはいるが、不意に日光が遮られた。

「…………？」

「邪魔だ」

聞き覚えのある声に顔を上げると、かがみおおじまきな鏡大路薪奈まきなだった。相変わらずのポニー・テールとお嬢様中学校を示す常盤台の制服で、買ったばかりの靴の裏に張り付いたガムを発見したときのような表情で辻霧を見下ろしている。

「あらーーお久しぶりー」

「…………邪魔だと言つたのが聞こえんのか」

「」の炎天下で周りの空気が昇華しないのが不思議なくらい冷然とした声で再び促され、辻霧も渋々身を起こした。

「いやー冷たいなー鏡大路さんは。この氷嚢のように冷たい」

「氷漬けにしてやろうか？」

「…………結構です」

奇遇にも鏡大路は今し方明日原が走つていったハンバーガーショップから出てきたところだつたらしく、辻霧の隣にちょこんと腰掛けると持つていた紙袋からハンバーガーを取り出してむぐむぐやり始めた。その光景に妙な既視感を感じる一方、お嬢様でも昼食にこんなジャンクフード食うんだなあと屈折した親近感と薄っぺらい感動を覚える辻霧だった。

通り向かいのハンバーガーショップの方に目を向けるとどうやら混みあつているようで、鏡大路がわざわざ通りを横断してこっち側のベンチまで来たのも全席が埋まつているからだと分かつた。こりや明日原時間かかりそうだなーとか思考しつつも何気なくウインドウに視線をやると、『デカデカと『ダブルチーズ、フィレオフィッシュ、ポテト半額!!』と貼り紙がしてある。混雑の元凶に辻霧は納得したが、ふと鏡大路の買つてきたメニューがモロにダブルチーズとフィレオフィッシュとポテトのSサイズであることに気付き、あの普段の一匹狼な鏡大路が「半額」という言葉に釣られて長時間列に並んでいたのだろうかと想像して思わず吹き出しそうになつた。

「何だ？ 何か言いたそうな顔だな」

笑いを堪えようとする辻霧の表情の微細な変化を見咎めた鏡大路はダブルチーズバーガーを咀嚼しながらじろりと彼の顔を睨みつけた。

「ん？ 別に。それよりお前、それ食べ切れるのか？」

「…………、」

育ち盛りの男子高校生にとつてはおやつのような分量でも、昼食にハンバーガー一つというのは女子中学生にはちょっとばかり重いメニューである。

表情にこそ出さないものの辻霧に指摘されてから初めて気付いたらしく、明らかに鏡大路は失念していた、という様子で手に持つているダブルチーズと紙袋の中のフィレオフィッシュを見比べていた。やつぱりこいつは変なところ律儀なくせに妙に抜けている。

数秒間逡巡した後、鏡大路は紙袋の中からフィレオフィッシュの包みを取り出すと辻霧に無造作に放つて寄越した。

「やる」

「お代は？」

「…………たかがハンバーガー一つにこだわるほど人間は小さくないと自負しているが」

「あ、そう。んじゃ いただくな」

明日原が戻つてくる前の前菜か、等とどうでもいいことを考えながら辻霧がぱくついていると、一足先にダブルチーズを食べ終えていた鏡大路がそっぽを向いてぼそぼそ話し始めた。

「…………その、一ヶ月前は、醜態を晒したな」

「ふま？」

突然何の話だろと辻霧は訝つたが、鏡大路は構わず続ける。

「お前が通報したと透通すきとおに後で聞いた。…………手間をかけさせたようで悪かった」

「…………、」

「とりあえずそれで貸し借りは無しだ。いいな」

鏡大路はそれだけ言うと、紙袋を鞄にしまって一度も振り向かず

に立ち去つていつてしまつた。

辻霧が今のが鏡大路なりの精一杯の「ありがとう」だつたのだと氣付くのに彼女が立ち去つてから暫く時間を要した。

フィレオフィッシュの最期の一欠片を咀嚼し、嚥下すると、辻霧は呆れたようにして溜息を吐いた。

「…………お前の命つてハンバーガー一個分なのかよ」

帰宅すると既に三時を過ぎていた。

「ん…………？」

三階の自室のドアの前で学生鞄を引っ搔き回し、自室の鍵を引っ張り出してから辻霧は妙なことに氣付いた。

ドアに鍵が掛かっていなかつたのだ。

（あららー…………今朝は確かに閉めてつた筈なんだが）

とすると原因は必然的に一つくらいしか思いつかない。

（…………空き巣、か）

「」の時辻霧が真つ先に考えたのは、「別段盗られて困るようなもんなんてねーし通報すんのもめんどくさいから別にいーや」ということだつた。

だが流石の辻霧も部屋に入つてすぐのダイニングに置かれた卓袱台の上で侵入者がすやすやと寝息を立ててることまでは予想が付かなかつたようだ。

「は…………？」

1LDKの間取りに生活に必要最低限の家具が雑然と置かれているだけの殺風景ないつもの部屋に、明らかに非日常の異物が混入していた。

風変わりな出で立ちの少女だつた。小柄な体格を夏場に嫌と言つほど似合わない黒い長袖のだるつとしたハイネックが覆つてゐる。そのせいいか少女の白金色の滝のように卓袱台から流れ落ちる長髪が、金を通り越して白っぽく見えた。それに輪をかけて目を引いたのは

彼女の顔だった。陶人形のように白く整つた顔立ちだが、左目の周りに刺青なのかメイクなのか、紫色の蜘蛛の巣に群青色のアゲハチヨウがかかっている意匠が施されている。それが戦慄するような魔術的な印象を辻霧に与えていた。

辻霧が帰宅した際の物音で田を覚ましたのか、華奢な不法侵入者はゆっくりと身を起こすと真っ直ぐに射抜くような視線で辻霧の方を見た。

「けだし」

「けだし」
どろつとした糖蜜が零れ落ちるような倦怠感を否が応にも感じさせる、そんな

声が唐突に辻霧の耳に飛び込んできた。

絶句して棒立ちになっている辻霧に向かって、少女は言った。

「腹が減つたぞ、辻霧単」

第二章 八月十六日 After/Before_The_Trouble

原作既読者の方は当然わかると思いますが、邂逅シーンは見たまん

まアレのオマージュです。

御意見御感想御批判等々々いつもの如くお待ちしていますのでよろ

しくお願いします

第三章 八月十六日 Black_Box_Uncnown .

第三章 八月十六日 Black_Box_Uncnown .

「君という主觀からして観測という事象がなければ僕は存在していないに等しかったことになる。僕の主觀にとつても同じく。ならばこの邂逅はある意味で両者の存在を確立させる上で必然性を伴つたものであると言い換えることが出来る。……では言葉を代えようか。例えば君がたつた今、そのアルミ製のドアノブに手をかけ、回し、ドアを開けて玄関に立ち入つて僕の視界に入つてくるまで、君が存在していなかつたわけではあるまい。あるいは同じ前提条件の上で、君が僕が存在するという事実を認識するまで僕は存在していなかつた、というわけでもないだろう。だがね。それらは互いに自我というものを持つていると仮定した場合にのみ成立し得るものだ。ましてや『観測』という事象そのものが観測対象に対して影響を及ぼしていないという証明など誰も出来ていないのだからね」

かれこれ三十分程度この調子だが、辻霧は本日にして初めて試験対策の明日原の講義よりも不法侵入を敢行した挙げ句他人様の家の卓袱台に寝転がつて延々と哲学的な説教を垂れる少女に対する応対マニコアルの方が役に立つであろうことを学んだ。

辻霧が体育座りで忘我の彼方へと自分自身を飛ばす遊戯に興じていると、どういった経緯で結論に到つたのかは不明だが、取り敢えず満足するまで話し終えた少女がごろんと立ち上がつた。

「けだし、話がまどろっこしくなつてしまつといかんな。なに、ちよつとした確認だ辻霧单」

そこで初めて辻霧はこの国籍不明の不法侵入者に口を開いた。

「…………あのさ、俺が忘れてるだけなんだつたら悪いけどやつを
からやけに馴れ馴れしいが誰なんだお前」

辻霧の予想していたおおよそのリアクションを裏切つて少女は意

外そうに眉をひそめた。

「おや、僕としては君の隣人として接してきたつもりだったのだが
辻霧單」

「隣人…………？」

「君の部屋を出て左隣の部屋の住人だ。おいはやいよみ及萩暦^{おいはやいよみ}。まさか認知すらさ
れてなかつたとは…………すまない。けだし、僕の不備だつたよ辻霧

單

「ちよ、待て待て」

「こゝは男子寮である。

(いやそんなまさかな…………？)

白すと辻霧の目線が暦の下半身の方に行つたのも無理からぬ事で
あり、彼が責められる謂われは微塵もない(筈である)。
「いや案ずるな辻霧單。けだし間違いなく僕の身体を構成する細胞
にY染色体は含まれていないから」

「おおそーかそーかそれは良かつた……じゃねえよ尙更根本的にお
かしいだろーが」

辻霧は体育座りから足を崩して胡座をかくとがしがしと頭を搔いた。

「いいかお前、こゝは男子寮なわけだ。健全な、女子禁制。お分か

り?」

「ん

「んじや何でお前はここに住んでるのかつづ一話になるわけだが
「なぜ住んでる……と問われたとこりで納得のいく回答を導き出せ
るとは思わないな、けだし」

「んじや納得させなくて良いから合理的に説明してみる」

「ああ…………」

暦は辻霧に背中を向けたまま暫くぼんやりと床を見つめていたが、

やがて言った。

「誰にも観測されていなかつたからだろ

う、けだし」

「オーケー、寮監に連絡だ」

即座に辻霧は立ち上がったが直後、あわてて「とか暦は卓袱台を踏み台に辻霧の頭に飛び蹴りを食らわせた。

「けばぶツ！！」

「まあ待て、早まるな辻霧単」

無様な格好でうつ伏せに倒れている辻霧に丁度馬乗りになつている形で暦は平然とそんな言葉を吐いた。

「…………『早まるな』じゃねーよ人んちにすかずか不法侵入して延々意味不明の説教垂れやがつて挙げ句がコレだ。もつお前ヤダ！！国に帰れ！！」

「帰れと言われても君の家の左隣に帰るだけなんだがな…………それより騒ぐ前に君、一番聞きたいことを聞きそびれてないだろ？」「んなこた今どーでもいいだろ？が警備員呼ぶぞクソガキ」

「僕がなぜ君の部屋へ不法侵入を敢行したか」

その言葉を聞いて、暦の黒い二ーソックスの下で暴れていた辻霧はぴたりと動きを止めた。

「そんな意味深な言い方するつて事は余程のことなんだろうなじやなきや俺はキレますよお嬢さん」

「…………既にキレているように見えることに関してはさておき」
きつちりツツ「ノミ」という前置きをしてから暦は真顔でこんなことを言い放った。

「僕はこの世界の人間ではない」

十一分後、卓袱台の上には炊飯器と醤油瓶、茶碗一膳と「はながつお（お得用3ダースパック）」に湯飲みと魔法瓶が並んでいた。辻霧と暦は丁度向かい合つようにして座布団に正座している。

おもむろに辻霧は厳肅とさえ言える表情で炊飯器の蓋を開け茶碗によそうと、かつおのパックを一袋慣れた手つきで開封し、丁度よそつた白米が鰹節に覆われるくらいの量を目分量で正確に投入し、醤油を適量円を描くようにかけた。暦の側に置いてあつた箸で素早くそれを七回半まんべんなくかき混ぜると、じとじとそれを箸と共に暦の前に置く（この間およそ十七秒）。

「食べなさい」

熟練の職人の顔で辻霧がそう薦めると暦はおずおずと慣れない動作で箸を握り、かき込み始めた。

即座に辻霧は魔法瓶から沸かしておいた煎茶を湯飲みに汲むと、それを静かに暦の前に置いた。

「飲みなさい」

すかさず暦が湯飲みを掴んで、飯を流し込むようとするのを辻霧は重々しい表情で見ていた。

そんなこんなで十五分程の食事が終わると、暦は頬にいくつか米粒をくつつけたまま、かふーっと満足したように一息吐いた。

「御馳走様でした」

「どうか、じゃあ行こうつか」

「あい」

満腹感で高揚している暦を連行し、そのまま玄関まで向かつた、が。

「ちえーすとオツ！！」

不意に正氣に戻った暦の小さくも強力な膝蹴りが丁度辻霧の股間の辺りでズドンッ！！と炸裂した。

「あはん」だか「ほひん」だか、とにかく何か変な呻き声を漏らしてそのまま辻霧は玄関に今度は仰向けにぶつ倒れた。

今度ばかりは暦も手加減しなかつたのか、実行犯本人もぜえぜえ息を荒げている。

「君はなあ辻霧…………！ 人の話を何を聞いていたんだ君は…………け

だし流石の僕でも堪忍袋の尾がブチンだぞ辻霧…………！」

「なあああにがブチンじゃワレ『僕はこの世界の人間ではない』だあ！？ そんな思春期に若氣の至りで公言しちゃいました的なイタタな作り話で不法侵入を正当化してんなや！？ 立派な犯罪やぞジヤリん子オ！？」

金的蹴りが何らかのボーダーラインだつたらしき辻霧もなぜか関西弁でらしくなく怒鳴り声をあげる。

散々筆舌に尽くしがたい舌戦を繰り広げた後、「ぐぎやあー！」と叫んで取り敢えず一人は休戦に入つた。

互いに部屋の端と端の隅っこでじめじめした視線を交わし合い、ふりふりしていると、辻霧の部屋のインターホンが鳴つた。

暦が餌の臭いを嗅ぎつけた猫のようにすいと顔を上げた。

「お客か」

「いいかお前、絶対顔出すなよ。色々と話がこじれるから」

若干落ち着きを取り戻しつつある辻霧はそう釘を刺すと玄関に向かつた。こんな年端もいかない赤の他人の少女を部屋に連れ込んでるなどと外部に知れたら社会的致命傷を受けるのは目に見えている。ドア越しに外を確認すると明日原だった。

「なーしたお前こんな時間に…………」

「ああ、なんか幅揮が昨日スキルアウトとやり合つただかつていて大怪我して入院しちゃつてね、ちょっとお見舞いに行つてたんだ」

「あーあのヘヴィメタ天使…………」

「？」

「いや、何でもない…………で、何の用だ？」

「そうそう、これ渡しに来たの」

そう言つて明日原が差し出したのはクシャクシャの紙切れ

辻霧の成績表だった。

「え？ お前これ……」

「いやつあのね、その…… 今日はちょっと明日原さん意地悪しちやつたかなーと思って」

拍子抜けしてまじまじと明日原を見つめる辻霧に対し、明日原はちょっと決まり悪そうに頬を赤らめ、視線を逸らした。
(つかいきなり改まって持つてこられてもなー……)

何だか互いに気まずい空気を感じる中、結局先に手を出したのは辻霧だった。

「ああ、そう。じゃあ一応受け取つとくわ、それ……」

「何だ明日原、君か」

不意に肩の辺りの高さから現在最も聞きたくなかった声が響いたので、辻霧の顔から面白いように一つと血の気が引いた。玄関口で明日原が驚いて目を丸くした。

「辻霧？ アンタの妹

なわけないわよね

「…………少なくとも俺の知る限りではウチの家系にプラチナブロンドの遺伝子は存在しないと思うが…………じゃなくて……！」
ぱつ、お前顔出すなってあんだけ

そこではたと辻霧は一つの違和感に思い当たつた。

「あ？ 明日原？」

「ん

「…………お前こいつと知り合いつた？」

「まさか。初対面だけど。何で？」

「いや、今こいつお前の名前…………」

二人して顔を見合わせ、暦の方を見ると、暦は呆れたように目を細めて二人を睨み返した。

「…………立ち話も難だ。中に入つてくれ。大事な話がある
猫が欠伸をするような表情で、暦は部屋の主人然として二人を招き入れた。

「時に『原石』の存在を君たちは知つてゐるかね」

卓袱台の前に正座させられた辻霧と明日原の前を講義中の大学教授よりしくゆつたりと歩き回りながら暦は静かに言つた。

「『原石』？」

「あたし聞いたことがあるかも」

言い淀んだ辻霧が隣に目を向けると、丁度暦も明日原の方をメイクを施された左目でじろりと見ていた。

突然注目を受けた明日原は少しだけ躊躇したが、

「学園都市で流行してゐる噂の一つに カリキュラム その、普通能力つていうのは学園都市で決められた時間割りに基づいた開発を受けることで発現するものでしょ？」

「ん？　あ、ああ、まあな」

明日原が意見を発表してゐるといつより単に自分に向かつて話しかけているらしさことに気付いて、辻霧は慌てて返事を寄越した。

「『原石』つていうのは学園都市外部の人間であるにも関わらず、開発無しで何らかの能力を自然に発現した能力者のことと言つらしいの」

「『自然に』つて……よく分からんんだが」

「えつと、能力開発に必要な条件・環境が偶然揃つことによつて……とでも言うのかしら」

「概ね、正解だな」

それまで黙つて二人の遣り取りを聞いていた暦が口を挟んだ。

「けだし、学園都市の『能力者』と『原石』の関係は言わば合成着色料と天然色の関係に近いな。いや、厳密に言えば違うか……まあ大体分かつて貰えればそれで良い」

歩き回っていた暦はそこでぴたりと足を止めた。

「『原石』は確かに実在する。故に僕は辻霧、君とコンタクトを取る必要があつた」

「…………話し相手の理解が追いつく前に話題を飛躍させるの、やめてくれないか」

暦がクスリと笑つた。

「失礼したな。まあまず、僕も『原石』だ」

その言葉の意味が疑惑と驚愕を伴つて一人の脳に浸透するのに暫く時間を要した。

「もともとイギリスの方にいたところを六年前に学園都市に保護されてね。学園都市内に戸籍を置くために本名も捨てる羽目になつた。学者連中には『シユレー^{ブラックボック}デインガーの猫^ス』とか呼ばれてたが」

「何なんだよお前の能力つて……」

思わず辻霧が尋ねると、暦は微かに困つたような表情になつた。

「ふむ……けだし説明するのが実に面倒なのだが。まあ良いか。ちょっとこれを見てくれ」

暦はどこからか油性サインペンを持つてると、卓袱台に直接何か丸とそれを繋ぐ線とで樹系図のようなものを描き始めた。

「あああお前…………」

定価3800円で購入した卓袱台が落書きまみれにされるのを見て辻霧が悲痛な声を上げたが、明日原が目力でそれを黙らせた。

「…………よし、と。まずこれ」

と言つて暦が指さしたのは樹系図の一番根本にあたる丸だつた。

「これを現在 例えはそうだな、現在君が自販機の前で

何を買うか迷つているとすると

「ああ、それで？」

「ここで君が『きなこ練乳』を買うか、『苺おでん』を買うかで世界は分岐する。要はフラグが立つたときの選択如何でルートが変わるものだな」

「？」

「いや、まあ忘れてくれ……それで、だ。僕が言いたいのは選択肢の数だけ『if』の世界が存在するということだ」

そう言いながら暦は最初の丸からジグザグに伸びた左右対称の一本の線をなぞり、各自の終着点である丸を油性ペンでコンコンと叩いた。

「君が『きなこ練乳』を買った場合、当然『苺あでん』を買った場合のその後を知ることはできないし、『苺あでん』を買った場合は『きなこ練乳』を買ったときのその後を知ることは叶わない」「…………ラクリマとかシャングリラとかそういう話はめんどくさい」

「まあその内分かるだろ……君にも……ああ、それで僕の能力だが」

暦は油性ペンのキャップを取ると、次第に無数に分岐していく枝を横断するように一本の太い黒い線を引いた。

「僕はどの『場合の世界』の僕とも経験を同期することができる。つまりは自分が選ばなかつた世界のことを知ることができるわけだ」

「…………は？」

意味が分からぬ、といった表情で辻霧と明日原は同時に言葉を発した。いや、より正確に言つならば意味は分かつた。だが理解は追いつかなかつた。

暦は他人事のように話し続ける。

「だからじやんけんなんかは負け無しだな。自分が負けた、もしくは引き分けた『場合の世界』で何を出したか把握しているから」「ほんっ」

唐突に辻霧がグーを出すと、暦も何の前触れもなかつたにも関わらず全く同時にパーを出した。

「だから分岐内容によつては僕は明日原早苗とはもつと前に会つている『場合』もあつた」

「それで名前知つてたんだ……」

明日原が納得したように呟いたが、そこで辻霧が思い出したように言った。

「あ、いやちょっと待てよ。お前の能力に関しては分かつたっつかまあ分かんなかつたけど……とりあえず、俺の部屋に侵入したことについては何の説明も為されてねーぞ」

「それに関しては」

「暦が立ち上がつた。

「これから説明する。今までの説明は全てこれから話すことの前提条件、前書きの様なものだと思って頭に入れておいてくれ」

「『原石』は極めて稀少だ。世界に五十人いるかいないか……とまで言われている。確かに数多の科学的考察・論証の積層によつて生み出された『能力者』は科学の集大成であると言えるだろうし、それを学園都市外部の環境の中で身につけてしまった『原石』はなおのこと稀有な存在であると言える」

卓袱台の向かいに座つて手の中で油性ペンをぐるぐると弄びながら暦は続けた。

「故に学園都市は一人でも多くの『原石』を狙つてゐるわけだ……単なる純粹な研究対象として集めているのか、『能力者』の専売特許を謳つていた学園都市にとつて外部に能力者がいるというのが面白くなかったのか……まあ、その辺は僕の知るところではない。だが現状ね」

暦はそこで左手の人差し指をぴんと一本立ててみせると、更にもう一本中指を立てた。

「学園都市は最低二人の『原石』を有している」

「き、君の他にあと一人はいるってこと…………？」

「そういうことになるな、明日原。そしてそのもう一人は……『履歴観覧』と呼ばれている」

暦はそこで油性ペンを弄ぶ手を止めた。

「ここからが僕にとっての話の核心なんだが…………数日前、僕はとある情報源から彼女が外部の人間から狙われていると知つた」

「外部？ なんでまた…………」

「さあね。とにかくそれだけでなくとも彼女はこれから非人道的な実験の食い物にされるかも知れない」

暦の表情が不意に倦怠感を帯びたものから切実なものへと変わった。

「僕は彼女を助けたい」

全員がしんと黙り込んだ。暫くの間誰も話さうとしないので、やおら辻霧が口を開こうとするとそれより先に暦が言った。

「君にとつての核心はここからだ、辻霧。僕は能力によつてあらゆる時系列・選択肢を吟味し、彼女を救い出すベストな手立てを絞つていつた。その結果」

既に暦が決意表明をして黙り込んだときから嫌な予感がしていた辻霧は、僅かにつばを飲み込んだ。そしてその予感は的中する。

「君達に協力を要請することが最高のルートだと分かつた。そのためにここに侵入し、君を待つていた。力を貸して欲しい。辻霧単」

『原石』＝傍目から見ると分かりにくいんだけど概念的にはす”い能力

みたいな認識が自分のなかではあるので（偏見？）「分かりにくいんだけど何それチート」みたいな能力を模索した結果今の形に落ち着きました。

「なんでこの能力で『シュレー・デインガー』の猫（ブラックボックス）『』なのか」ってことに関しては説明するのが面倒なので知りたい方は感想コーナーまで

実は「シュレーディングガー（原作準拠）」にするか「シュレー・デインガー」にするかで迷つてたりしたんですが結局語感がいいので後者に決定しました。気になつた方にはここで弁明しておきます；以上、今回の言いわく：後書きでした！

ついこの間までの辻霧なら即座に「めんどくさいんでバス」と答えていたかもしれない。しかし、昨日辻霧が出した答えは彼にしては珍しく「保留で」だった。

だがこれまでの強硬姿勢を見せせず曖昧な返答を寄越したことで間違いなく辻霧は今回の面倒事に巻き込まれるであろうことを薄々確信していた。「やるに決まってるじゃない当然」と息巻いていた明日原が嫌でも昨日バスしなかったことを盾にぐいぐい引きずり込んでくるだろうし、何より不思議なことに、辻霧自身がここで身を退くことに対して小さな抵抗を感じていた。

「何なんだうな……全く」

がしがしつと頭を搔くと、辻霧はコンビニへの道を急いだ。

明日原先生のありがたい夏期講習に付き合わされた後の帰路、喉が渴いたので校内に設置されている自販機に向かうと見事に空だつた。運動部は夏休みも元気に活動中らしい。

仕方なくこうして涼しい路地裏の近道を通つて大通りのコンビニへと向かっているという事情だった。

「…………ん?」

ふと前方に妙な人影がいることに気付いて、辻霧は自然と歩調を落とした。

彫りの深い顔立ちと180センチを越える長身からして外国人の青年だと言ふことが見て取れた。ゴシックなデザインのシルバーピアスが片耳に鈴なりにぶら下がつており、左目の下に涙のような青色の滴の形をした刺青が入っていた。この真夏日にも関わらずチエ

ック柄のマントを羽織り、ベルトに装飾的なショートソードがぶら下がっている。

日本に役者修行に来た外国人…………と意味不明な想像を膨らませながら辻霧がその横を通り過ぎようとすると、青年が声をかけてきた。

「あ、少年。少しくものを問いたい」

流暢な日本語だった。しかも何か武士っぽい。

「…………何？」

「ああ、五里霧中の私に救いの手を差し伸べる者がいないかと途方に暮れていたのだ」

頭の片隅に『警備員に通報する』という選択肢を留めておきながら辻霧は青年の格好を頭の先から爪先までとくと眺め、慎重に質問した。

「一応アンタ何してる人？」

「…………魔術師、かな」

イングリッシュ・ショジョークだと思つて笑つといった方が良いのか？だが青年の表情にはユーモアの欠片すら浮かんではいなかつた。『で、何だ？俺第7学区の地理はあんまり詳しくないけど』

「ああ、いや何、建物ではなく人を捜しているんだ」

青年は穏やかに言った。

「及萩暦という少女を知らないか」

突然電流のように辻霧の全身に漲つた嫌悪感と警鐘を鳴らす直感が絶叫していた。

「こいつは間違いなく『敵』だ。」

「何者だよ、お前」

明確な敵意と共に脊髄に走る緊張感に身体を強張らせながら辻霧が呟くと、以外にあつさりと自称魔術師は答えた。

「ヴァーダント＝ブレイドアクト…………いや、Superbi a 91 2と名乗つた方が適切か。君のその様子を見ると、ヴァーダントのその言葉の意味するところを理解してはいなかつ

たものの、辻霧は今の言葉が間違いなく自分に対する青年の宣戦布告であるということを悟っていた。

「……悪いけど俺の知ってる『及萩暦』さんは到底お前みたいな異国情緒溢れる怪しいお友達がいるような人ではないと思うんだよね」

「そうか」

水彩画に描き足された油彩の人物のような圧倒的存在感を放つ青年と、騙し絵のように主観的に見れば何ら違和を覚えない不気味な少年が対峙する。

最初に動いたのは辻霧だった。後方に跳びすると同時に両手を前に突き出し、その動作に伴って黒い正八面体が空間から膨張するよびにして出現する。さらに辻霧が指先を動かすと、幻影はシャキンッ！ と万華鏡の模様の様に展開し、先端に十四本の鋭い四面体を持つ幾何学的な形状に変貌を遂げた。その鋭利な爪が槍のように目の前の青年に向かって突き出される。

その一連の動作が一瞬で完成されたにも関わらず、ヴァーダントがとつた行動はただ一つ、腰に下げていたショートソードを抜き放つただけだった。

ギャインッ！ とこの世のものではない音が響いた。

（おいおい、冗談だろ！？）

ありえない現象が起こっていた。

四次元から投影した影に過ぎない辻霧の幻影が、刃も切つ先もないショートソードにバラバラにされていた。

（こいつ）

その現象から推測される事実は一つしかない。

（次元を切断しやがったのか……！）

表情に意外そうな色を含ませた青年が言った。

「ふむ……学園都市の能力開発についてはある程度聞き及んでいたが、また変則的な能力だな。少年」

「…………お前もな」

それだけ言うと辻霧は今度は魔術師の目の前の空間を起点にバオツー！と立方体を出現させる。それを青年は瞬きをするより退屈な動作だとでも言つように簡単に切り捨てた。

（…………反応速度が人間業じゃねえだろ…………）

駆けだした青年のルート上に次々と幻影を出現させると、全て避けられるかショートソードに切り捨てられるかだった。

（これなら…………！？）

辻霧は空中に足場となる幻影を作りだして飛び乗ると、その形状をジャキッ！と地面に向かつて突き出される針千本のような形状に変化させた。

ザシユザシユザシユツー！という凄まじい破碎音と共に足下の地面が連続して爆ぜた。

もうもうと土煙が立ちこめ視界が悪くなる中、辻霧が目を凝らしていたその時、唐突に辻霧の足先数センチの辺りからショートソードの刀身が飛び出し、辻霧の足場を切断した。

「おおっ！？」

不意を突かれて能力に支障を来したのか、辻霧が足場にしていた幻影は一瞬で収縮し、間抜けな声と共に辻霧はドサツと穴だらけの地面に落下した。

「くっそ…………！」

休んでいる暇もない。突進してくるヴァーダントの視界を遮るようになり巨大な幻影の壁を出現させ、左に転がった。

狙いをつけ損ねたヴァーダントの一撃は辻霧には当たらなかつたが、轟音と共にバラバラに吹き飛んだ幻影の破片で辻霧もバウンドしながら地面を転がる羽目になった。

立ち上ると、振り返った魔術師はキュガツー！と地面を蹴つ

た。

走るだとかそういう次元の話ではない。辻霧が反応するより速く、たつた一度地面を蹴るだけで魔術師は辻霧の目の前へと移動していった。

（！！ やつべ ）

魔術師が微かに口元を歪めた。

「レーヴァテイン」

次の瞬間、魔術師の振るつたショートソードの軌道が真っ黒に塗り潰された。

「！？」

辺りの光源が遮断されて暗くなつたのでもなく 文字通り完全に、空間のその部分だけが切り取られたかのように、目にに入る光という光がゼロになつた。

瞼の裏側より暗い視界を覆う黒に一瞬辻霧の思考が中断する。後方 遠近感覚ゼロのこの状況では間違なく間合いを潰される。左右 それこそ回避に不確定要素が入り込む余地があり過ぎる。残された選択肢は

（ 前方！！ ）

カンで足下に『幻影』を出現させるとそれを蹴つて低く構えていた魔術師の肩の辺りめがけて跳んだ。

直後、

「カーテナ」

再び魔術師の声がどこからか響いた途端、辻霧の視界も塗り潰されたときと同じく不意に元に戻つた。

「があッ！！」

盲目の状態で跳んだためか、辻霧は空中でバランスを失つてそのまま背中から地面に激突した。着地には失敗したもののが魔術師の必殺の一太刀は空振りに終わつたようだ。

咳き込みながら辻霧が振り返ると、魔術師は舌打ちをしながら剣を構え直した。

その時、辻霧はあることに気付いた。

(? あれは)

「悪運が強いようだな、少年」

ショートソードをビュツ！！ と音を立てて振ると、ヴァーダントは苦々しげに言い放った。

「だが貴様に唯々諾々として情報を提供する意志が無い以上、『シユーレーディングガーの猫』を追っていることを知った貴様を生かしておく訳にはいかないんだ」

ゆつくりと、魔術師は最後の一太刀を浴びせるべく地面に倒れ込んでいる辻霧に歩み寄った。

「恨みはないが、許せ。そして」

逆光で黒い断罪の処刑人の如く立ちはだかるヴァーダントは、逆手に持つたショートソードの切つ先を下に倒れている辻霧の心臓に向けた。

「速やかに死ね」

辻霧の目が見開かれ、処刑の刃が振り下ろされるその瞬間、不意に魔術師はぴたりと動きを止めた。否、動作を中断したのではなく、文字通り唐突に石化したかのように

「動くな」

魔術師の背後から響いた聞き覚えのある第三の声に辻霧は虚を突かれた。

いつの間にか鏡大路薪奈が、指鉄砲の形にした右手の銃口に当たる人差し指を魔術師の背中に突きつけていた。即ち『触れた物体の質量、熱量、体積に関わらず慣性を無視してその運動状態を「静止」にする事ができる』その指先で。

「無様だな、辻霧」

命助けた後の最初の一言がそれかよ。

「…………つかお前はここで何してるわけ」

「別に。偶然通りかかっていたら一方的な『弱いものいじめ』の一面が視界に飛び込んできたまでのことだ」

「…………」

不服そうに口をへの時に曲げる辻霧を無視し、鏡大路は捕縛したヴァーダントに話しかけた。

「さて、何が楽しくてこんな阿呆を弄り倒してたんだか吐いて貰おうか。返答次第では氷河時代体験のおまけ付きで警備員アンチスキルにご厄介になることになるが」

ヴァーダントは暫く黙つたままだつた。が、不意に苦々しげに口を開き、一言だけ発した。

「フラガラッハ」

「ツ！？」

咄嗟に鏡大路が前に転がつたのも無理はなかつた。魔術師がそう呴いた刹那、彼の手に握られていたショートソードが意志を持った生き物のように手から飛び出すと、大気を引き裂いて上空に舞い上がり、レーザーのような精度と速度で真つ直ぐに鏡大路が今までいた場所を貫いたからだ。

鏡大路と辻霧が立ち上がつたとき、既に魔術師は地面に突き刺さつたショートソードを引き抜いて体勢を立て直していた。

「そろそろ退き際のようだな。この辺りで失礼させてもらひ。だが少年」

ヴァーダントはショートソードで真つ直ぐに辻霧の心臓を指した。「君は間違いなく本件を持つて私の敵となつた。次に会うときは必ずその息の根を止めてやる」

そう捨て台詞を残すと、魔術師は地を蹴り、超人的な脚力でビルの壁を蹴つて屋上へと飛び去つていつた。

「…………何だつたんだ今」

「私が聞きたいよ。というか何がどうなつてお前は見ず知らずの外国人とセッションしてたんだ」

ヴァーダントが去つてから急に足の力が抜けてへたり込んだ辻霧

は、実にめんどくさそうに鏡大路の方を見上げた。

「ここで説明すると及萩曆の訳の分からぬ依頼に鏡大路を巻き込み、結果さらにめんどくさい状況に陥るかも知れない。しかし説明しなかつたらしなかつたで文字通り身も凍る体験を余儀無くされる恐れもある。

二つの面倒事を秤にかけ、辻霧は仕方なく言った。

「……役者志望の外国人に稽古を付けて差し上げてました
ぶん殴られた。

第四章 八月十七日 Superbia912・(後書き)

はい、戦闘パートです。

こいつらの場合別次元でどうこうになつてんのか考えながら書かなきやならんので非常に面倒くさい思いをした覚えがあります。

「全次元切断術式とかまた厄介なもん考え方やがつて鎌池め」みたいな（嘘）

正直この戦闘シーン書いたのが結構前であるにも関わらず、「これ辻霧絶対ヴァーダントに勝てないんじゃ？」と自分自身で掘った思考の泥沼にはまり、解決できたのがつい昨晩でした（アホ過ぎる）何はともあれ、あと三章程度で第一話完結です。どうぞお付き合いください

ぐだされ

「厄介な奴に目を付けられてくれたな辻靄單」

帰宅後ごく当たり前のように施錠しておいたはずの自室でくつろいでいた隣人にその日のことの次第を説明すると、暦は眉間に皺を寄せてさほど焦っていないような様子で言つた。

「何なのあの……『厄介な奴』って。お知り合い？」

午前中は明日原の説法めいた講義に延々付き合わされ、午後は午後で自称魔法使いの怪しいに一ちゃんとにどつき回された挙げ句年下の女子に殴られるという散々な目にあつた辻靄は満身創痍で玄関に大の字に寝転がりながら首だけリビングの方に向けて呻いた。

「まあ……な。英國に居たとき顔馴染みだつた程度だが」

「件の『原石』を狙つてる外部の人間つて奴か？ にしても狙われてんのは……なんつたつけ？ お前のお友達の方じゃないの？ あのピアスゴリラお前のこと探してるみたいだつたけど」

「けだし、広大な面積の見知らぬ土地から所在も分からない人間を捗し出すよりはその所在を知つている知人を狙つた方が効率が良いということだろうよ」

何とか半ば蹴飛ばすようにして靴を脱いだ辻靄は足だけで仰向けのままずりすりと廊下を滑つていくと、そのままリビングにござりと寝転がつた。

「つか気になつてたんだが、あの野郎『魔術師』がどーのとかほざいてたぞ。日本語の苦手な海外の能力開発機関の回し者とかそういうオチをこつちは期待してるわけだが」

暦は卓袱台の上で膝を抱えてテレビのバラエティ番組を見ていた

が、それを聞くとなぜか侮蔑するような眼差しで辻霧を見下ろした。

「…………身を以て体験した事実を否定し、不安定な大衆心理の上に成り立つ常識に縛る人間を僕は『愚か者』と呼んでいる」

「あー分かった分かった。俺はそこまで固い頭はしていないから……」

「…………てことは実在するのか。魔術師つて」

「そういうことになるな」

「ふうん」

「…………」

「…………何だよ」

「…………いや、あっさり納得したなあと」

「別に何が現実で何が虚構かなんて興味ねーし。『事実は小説よりも奇なり』つつーだろ。お前みたいなぶつ飛んだやつが世界にン十人も存在してるくらいなんだから今更魔術師の一人や一人天から降つてこようが地から湧いて出ようが俺は気にしないよ」

暦は暫く黙っていたが、やがてテレビの音量を下げる辻霧の方に向き直った。

「そうか。けだし、気にしないのは結構だが、必ず近い内に君は再び彼と見えることになるだろうね」

「は?」

「左腕」

暦が無造作に指し示した自分の左腕を見やると、二の腕の裏に紙切れが貼り付いていた。間違いなく普段通りにしていれば気付かないような代物だ。表面に刺々しい複雑な記号が書き込んである。

「これって……」

「簡単な追跡探索用術式だな。つくづく厄介な男だよ、あいつは『ぴょんと卓袱台から飛び降りた暦は事も無げにそう言つとべりつとその紙を辻霧から剥がした。」

「ちょ、ちょっと待て。てことはここが……」

「ああ。バレてるな」

「やばー……くないか?」

「けだし」

暦は剥がした紙切れを見ながら慎重に言った。

「今急襲するということはないな。奴の狙いはあくまで『履歴閲覧』だ。来るにすれば……僕達が『履歴閲覧』を救助してここに戻つて来たときか、そうでなければ救助に向かつた先かな。まあ念入りな奴のことだから術式が剥がされてもしばらくの間効果が生き続けるくらいの応用は施しているだろうし」

「んじゃ術式の効果が薄れるまで待機して、救助した後ここに戻つてこないとか……」

「そんなことをすれば奴は必ず別な何かを仕掛けてくる。この寮の人間全員を人質に取るとか……まあ方法はいくらでもある。それにあまり彼女の救助を先延ばしにしたくない」

暦はそう言つてきつと真正面から辻霧に向き直つた。

「今夜だ」

「？」

「今夜決行する。明日原にも伝えておきたまえ。夕飯を済ませたらすぐここに来いと」

「第一八学区更級薬学部保健センター…………ね

深夜、終バスを乗り継いでやつてきた三人の目の前には巨大な建物がそびえていた。全体的に丸みを持たないフォルムと白い外観が研究所や病院を連想させる様相を呈していたが、今やそれらも夜闇に紛れ、不気味な雰囲気である。

「本当にこんなとこにいるのか？ そのアカ何とかさん

「けだし、確かだ」

そう言つと暦は建物の周囲に張り巡らされていた鉄条網の柵をよじ登り始めた。幸い風が強かつたので登る音はあまり目立たない。暦の後に続こうとした明日原を辻霧が呼び止めた。

「おい」

「何よ」「よ

そう変にくぐもった声で言つて振り返つた明日原の姿に辻霧は溜息を禁じ得なかつた。黒い半袖のシャツに灰色の短パン、そして野球帽にサングラス、止めどばかりにマスクまでしている。肩からはそこにあるのが当然であることを主張するかの如く金属バットの黒い細長いケースがぶら下がつていた。

「…………もうちょっとマシな格好は出来なかつたのかお前は「失礼ね。超が付くほど完璧じゃない」

「…………」

とりあえずこいつがヘマをやらかして捕まつても見捨ててこいつ決意する辻霧だった。

先に鉄条網を登り終えていた暦が辻霧を手招きした。

「あそこ」

「ん？」

「警備員がいる。『幻影』で注意を引き付けられるか？」

「…………やってみる。合図したら降りろよ」

辻霧は鉄条網の上で慎重に手を伸ばすと、複雑な形に指を曲げ、組み合わせた。すると不意に自分達のいる側とは警備員を挟んで反対側にすいと『幻影』が出現した。暗がりで遠目に見れば人型に見えないこともない。

「やるじゃないか」

「…………賞賛どいつも。それは良いけどさつとと行つてくれ。指が響りそうだ」

辻霧がもう一動作加えると幻影から鋭い棘が伸び、向こうの鉄条網の一部を破壊した。警備員がそれに気付いてライトを幻影の方に向けると同時に、辻霧は幻影を一気に収縮、消滅させ、足音を忍ばせて先に柵を降りていた二人の後に続いた。警備員が一瞬ライトが照らした人影を怪しんで持ち場を離れるのを確認し、急いで建物の影に隠れる。

「で、どこから入れるのか分かつてんだろうな一応」

「厳密に言えば分かつていなかがね。こつちだ」

能力でルートを特定しているのか、暦は猫のように敏捷に一人を導いていった。途中「端に寄れ」「壁に背を付けて」等と指示していった辺り、監視カメラの位置まで把握済みらしい。

「さて」

「どこをどう抜けたものか、一行は建物の中庭のような場所へ出ていた。」

暦は左手奥の方にある少し高い位置の窓を指し示した。

「けだし、丁度高校生一人が肩車すれば届きそうな位置じやないか」

「…………、」

「…………、」

「「「じゃんけんぽんっ！！」」と威勢良く辻霧がチヨキを出し、

明日原がグーを出した。

「『重い』とか言わないでよ」

「キツい」

「…………バカ」

明日原が窓の桟に手をかけてスライドをせると、あっさりと窓は開いた。

「どこぞの研究員が煙草でも吸おうとして開け放しにしていたんだろうね」

先に明日原が辻霧の肩の上から窓を潜つてもぞもぞと侵入し、続いて暦が明日原に引っ張り上げられて中に入った。最後に辻霧が四苦八苦しつつもどうにか中に転がり込んだところで明日原が窓を静かに閉め切った。

「（こ）から先は監視カメラを気にしなくていい」

「…………？ 何で？」

「それが…………」

そう言つた暦自身腑に落ちないという表情をしていた。

「なぜかよく分からぬが監視カメラの機能が妨害されているんだ。リアルタイムの映像を送信できていなければ」

「あの野郎か」

「けだし、そんな術式は無かつたはずだが……」

一行が侵入したのは薬品保管庫のようなところだった。硝子製の「予備知識のない方は触らないで下さい」と書いてあるような大小様々な瓶がぎつしりと並ぶ埃っぽいアルミ製の棚の間を縫うようにして進み、音を立てないように慎重にノブを捻つてドアを開け、ひんやりとした廊下に出る。非常灯だけが煌々とケミカルな緑色の光を放つている様は不気味だつた。

複雑に入り組んだ廊下を例によつて暦の先導で進みながら、辻霧はふと気になつていていたことを尋ねた。

「そう言えば外部の能力開発機関じゃなら何で『魔術師』が『原石』を狙うんだ？」

「…………僕の能力の説明と言いぢりしてこいつほんほん面倒な質問ばかりしてくるんだ君は」

「こちとらいきなり訳分からん世界に放り込まれて頭のキャパが許容量越えてんの。…………つたく知らない方がめんどくさいなんて状況初めてだ」

「良い兆候じやないの」

明日原が口を挟んだ。

「ところで『魔術師』つて？」

辻霧と暦は顔を見合させたが、暦は「任せた」と言い、辻霧は「

その内分かる」と言つて話はそこで終わつた。

「止まれ」

不意に暦が辻霧達を制した。

大凡十分は複雑に入り組んだ廊下を進み、確実に建物の深層へと近付いていた頃だつた。

「いる。ヴァーダントだ」

廊下の奥の暗闇を凝視しながら暦は低い声で言つた。

「お出でなすつたか。で、どうするんだ?」

「決まつてゐるだろう。明日原」

「何?」

暦が近付いてきた明日原に何か耳打ちすると、明日原は怪訝そうな表情で何か聞き返したが暦は大丈夫だという風に首を振つて、辻霧には何を話し合つているのか全く聞こえていない。

「おい、何だ?」

「ちょっと待つてくれ。すぐ教えるから」

更に暦は何か耳打ちし、明日原は漸く身を起こすと辻霧達が進んでいたのと逆方向に足音を立てないよう而去つて、いつた。

「大丈夫か? あいつ一人で行かせて?」

「センター内のセキュリティが作動する恐れが無い以上、現状注意すべきはヴァーダント一人だろう。『履歴閲覧』までのルートは教えておいた」

そう言つと暦は辻霧の前に一步出た。

「……来るぞ」

廊下の奥の暗闇で何かが動く気配がした。やがて長身の魔術師は緑色の非常灯の下に姿を現した。

「 キリエだな」

「ヴァーダントか」

キリエと呼ばれた暦は臆することなく自分より十センチは高い位置にある魔術師の視線を見返した。

「貴様ならここへ来ると信じていた。美しい友情だな……七年経つても貴様は変わらない」

「けだし、お前こそ未だに外から与えられた力に固執する傾向は治つちゃいないだろう。進歩が無いな」

「進歩、か」

魔術師は暦の言葉を鼻で笑い飛ばした。

「今私の七年前の私と同じだと思つて貰つては困る。そして私の存在を以て英國は進歩する」

「歴史の過ちを繰り返す氣がヴァーダント」
不意に暦の声色が怒氣を帯びた。

「…………何の話だ」

「巫山戯るな。お前のその靈装と『履歴閲覧』の一いつが揃えば目的
は火を見るよりも明らかだ。止せ。アレが今更女王の手に渡つたと
ころで眞の統治は復活しない」

「おい、さつきから意味わからんねーんだけど」

背後からの憤りと前方からの威圧感に挟まれて重圧に押しつぶさ
れそうになつていた辻霧が見かねて言つた。

「奴の目的は故国の栄華の復活だ」

ヴァーダントから目を離さないまま暦が唸つた。

「奴はそのためにはかつて英國の統治者が振るつたという宝剣
カーテナが必要だと考えている」

「当たり前だ。お前の言つた『歴史の過ち』はカーテナが人類がそ
の全力を振るうには早すぎる力だったこそ起きたことだ。故に時は
満ちた今こそ復興の時だと私は考える」

傲然と言つてのけたヴァーダントをなおも暦は睨み続ける。

おずおずと辻霧が、

「…………要は昔人の手に余るような武器が英國の衰退の原因になつた
にも関わらず、こいつはもう一度それを手に入れようつて魂胆か
「飲み込みが早いようで助かるな」

「それは良いが……で、『履歴閲覧』は何で必要なんだ」

意外にもその問いに答えたのはヴァーダントだった。

「『履歴閲覧』は

次章、いよいよ履歴閲覧の能力とヴァーダントの目的が明かされます。

更新空くかもです。

感想お願いします！！

第六章 八月十八日 Academic_Record_Unknown .

第六章 八月十八日 Academic_Record_Unknown
n .

幾つもの怪しげな部屋を通り抜け、迷路のような建物の中を何とか教えられたルート通りに進み、漸く明日原は隔離病棟のような一室に辿り着いた。

「えーと、セキュリティはダウンしてるのよね。ijiも……」
明日原が病棟の戸を引くと、役立たずの電子ロックが取り付けられている重たい扉はゆっくりと開いた。

「お、お邪魔しまーす……って言うのも変ね、この場合」

独りで深夜の広大な建物の中を徘徊することに心細さを感じているのか自ずと独り言が多くなっている明日原だった。

「……『履歴閲覧』さん？」

「どなた？」

病棟の奥のカーテンの向こうから鈴を転がすような細い声が聞こえた。

明日原が近付いて恐る恐るカーテンを引くと、瘦せた少女がベッドから身を起こして自分の方を見つめていた。肩くらいまである艶を失った黒髪が微かに揺れる。

「あ……えっと及萩暦って人に言われてあなたを助けに来たの。逃げよう。何か、『魔術師』って人も来てるみたいだし。急がないと」「暦ちゃんが？」

『履歴閲覧』は驚いたようにそう言つと、腕に取り付けられていた点滴のチューブを抜いてベッドから出ようとした。その脆弱な体が地に足が着くと同時によろけるのを見て明日原が手を貸す。
「乗つて。暦ちゃんの所まで走るから」

「あ、はい。すいません」

やけに時間をかけて『履歴閲覧』は明日原の背によじ登つた。

「よし、と……急がないと……辻霧が……」

「『履歴閲覧』の能力は極めて変則的だ。以前見えた君を凌駕する程ね」

魔術師は淡々と言葉を続けた。

「カーテナは今や厳重な警戒態勢の元に保管という名目で封印されている。その製法は今や失われ、実物を忠実に真似て作られたセカンドさえオリジナルの一割程度の力しか持たない。そこで……『履歴閲覧』の出番となるわけだ」

「何？」

「『履歴閲覧』には過去が見える」

双方、動く者はなかつた。暦の田つきが一層険しいものになるのも構わず、ヴァーダントは言つ。

「この世の、あつとあらゆる空間に刻み込まれた履歴を閲覧する。即ちカーテナの失われた製法さえ見ることが可能だ。その意味するところはカーテナの完璧なコピーを作り出せるということだ」

「……王になる気がヴァーダント」

「まさか。そんな大それたことは考へてはいない。私はあくまで国に忠義を尽くす騎士として己の信念を貫いているまでだ」

魔術師の言葉に嘘は無かつた。少なくとも辻霧にはそう感じられた。嘘などという軽々しい言葉で塗り固められるほど半端な覚悟ではないことを、この場にいる全員が感じていた。

ややあつて暦が苦々しげに言い放つた。

「けだし、それがお前のそもそももの間違いの元だヴァーダント。武装がもたらす繁栄などという安易な青写真に目が眩み、民心という最も国力の糧となり得るものから目を背け国への忠義などとよくも言えたものだ」

「戯れ言だな」

次の瞬間、既にヴァーダントは辻霧の目の前にいた。

「 つー？」

「 カーテナ」

魔術師がそう咳いてショートソードを抜き放つと同時に辻霧は暦に背後から足払いをかけられ、思い切り廊下に倒れ込んだ。その鼻先すれすれの所をショートソードの刃が通り過ぎる。

「 左に転がれ、辻霧！！」

飛びすさつて安全圏に逃れた暦が叫んだ通り、辻霧が左に転がると間一髪で全次元を切断するショートソードが「ゴバツ！！」と廊下を抉つた。

「 がはッ

咳き込む間もなく暦の指示どヴァーダントのショートソードが飛んでくる。

（早 ）

ガガガガツ！！ と次々と遮蔽物を無視して廊下を切断していく魔術師から逃れるべく、辻霧は手近な部屋に飛び込んだ。

何かの実験室であるらしく、いくつものテーブルと実験用の機材が置いてある。

（くそ 何か無いか……！？）

悠然とヴァーダントは実験室に足を踏み入れた。暦を襲つても彼女の能力で攻撃は全て見切られてしまう。それならば自分に対して防御の術を持たないあの少年を狙つた方が得策だと思つたからだ。

「 出でこい。大の男が逃げ隠れするなど騎士道に反する」

その時、ヴァーダントは見た。

自分の入ってきたドアとは反対側の入り口から火の点いたマッチが投げ込まれるのを。

（まさか ！？）

彼の目が引火の直前、床で割れて転がっている氯化水素の大瓶と開け放しになつているガスの元栓を捉えた。

研究室そのものが一つの爆弾と化す直前、部屋の外にいた辻霧と暦は魔術師の言葉を聞いた。

「デュランダル」

「グバツ！――――――――――！」　　といふ轟音と共に爆風が巻き起こり、
金属製の扉が内部からの圧力に耐えきれずクシャクシャになつて吹
き飛び、反対側の壁に激突した。

少ししてから落ち着いた頃、恐る恐る辻霧は実験室の中を覗き込
んだ。
そして。

焼け焦げ、原形を留めない机や実験機材の残骸の中、爆心地に無傷で立つ魔術師を見た。

「その靈裝…？」

暦がぎよつとして目を見開いた。

一流石に気付いたか

ヴァーダントは微笑するとカーテナ"レプリカをくるりと回した。

ががが馬二崩れの辻へ前魔術師が 何でも轉れる姫 一振りで世界に闘いを挑めるとでも本気で思つていたのか？ 私の覺悟も見くびられたものだな」

汎用型靈装の応用か。術式解釈の矛盾の網の目を潜るのはさぞか

し骨が折れたことだらうよ」

「ど、どうしたことだよ

？」

驚愕に立ち竦む辻霧に、ヴァーダントは表情に余裕の色をえ滲ませながら簡単に説明した。

「つまり この剣はカーテナに留まらず、世界中のありとあらゆる剣に纏わる術式を重ねているということだ。私が指定した靈装に次々とこいつは化けるぞ、少年」

『光の殺戮術式』を持つレー・ヴァテイン、『現象切断術式』を持つデュランダル、『必殺術式』を持つフラガラッハ、そして『全次元切断術式』を持つカーテナ 状況に応じて、ヴァーダントのショートソードはその特性を変える。先刻の「爆発」という現象はデュランダルによつて切断されたようだ。

「 武装を一番の力だと考えるお前に相応しい靈装というわけか」

嘲るような調子でそう言つた暦の表情に同時に焦燥の色も浮かんでいるのを辻霧は見て取つた。

じりじりと後退りながら暦は低い声で辻霧に囁いた。

「一旦退くぞ。そろそろ明日原が『履歴閲覧』を救助し終えているはずだ」

「あの魔術師はどうするんだよ」

「……逃げながらでも対策を考えるしかない」

「走るぞ」という暦の一言と共に二人は踵を返して廊下の暗闇に向かつて駆け出した。

魔術師が焦る必要はなかつた。確實に二人を捕らえきれると分かつていたからだ。それを踏まえた上で暦は逃走に踏み切つた。

明日原の戻りのルートを逆から辿つていつたので二人は簡単に合流できた。

「『履歴閲覧』は…？」

「無事確保！ ちょっとアンタが背負つて」

枯れ木のように痩せ細った少女を辻霧が背中に背負い、再び三人は走り出した。

「どっちだ！？ どっちに行けば奴を撒ける？」

「……」

暦は突然立ち止まり、考え込むように押し黙ってしまった。

「……？ おい、どうしたんだよ及秋……」

「……こっちだ」

暦は黙り込んだときと同じくらい唐突にまた駆け出した。ジグザグに廊下を疾走し、一行は全体的に細長い妙な部屋に出た。いくつもの円筒形の水槽のようなものが両脇の壁に並び、仄かな光を放っている。その向こう側に右側の壁から伸びる通路があつた。丁度部屋と通路が丁字路のように交わっているらしい。

「培養器……？」

明日原が思わず呟いた言葉を無視し、暦は部屋の中へ入っていくとそこで立ち止まった。

「いよいよ怪訝に思つた辻霧が問いただそうとしたとき、暦が声を発した。

「無理だ」

「え？」

「あの時点でのルートを選んでも捕まることになつていたらしい」

「！！」

その言葉が合図だつたかのように、部屋の反対側の暗闇から魔術師が姿を現した。

「諦めが早いよで助かる。『履歴閲覧』をこちちに寄越せ

「……断る」

全ての手段が封じられてなおも暦は決然と言つてのけた。

「今更英國が強大な武力を持つたところで近隣諸国との新たな軋轢を生むだけだ。分からぬのか？ お前は戦争の火種を祖国に持ち

帰ろうとしている

」

「笑止千万だ。どちらにしろ全てはここで決まった。命をなげうつてその火種とやらをこひらに引き渡すか、生きたまま引き渡すか、その違いしかない」

「無駄です」

不意に辻霧の背後から第五の声が響いた。

『履歴閲覧』は辻霧の背の上で衰弱しきった様子で、それでも断言した。

その時辻霧は気付いた。

「あれ お前

」

ほぼ同時にヴァーダントも気付いたようだ。

まるで信じ難いものを見たかのよくな、絶望しきった表情で声を発した。

「…………つ！？ さ、貴様

目が

」

「はい。見えません」

『履歴閲覧』は何の感慨もなくそう言つた。

見えない目で、真っ直ぐに魔術師を見つめながら彼女は続けた。
「故に貴方の悲願は遂に叶わぬものとなりました。もう私の目が空間の履歴を見ることがない

う呪われた存在に頼らないで」

「呪われた……？」

「学園都市の狂つた実験のモルモットにされるためだけに世界中から集められた『原石』に人権は望まれない」

『履歴閲覧』はなおも言つ。

『量産型 幻想殺し』の試作開発『実行不可』、『存在の定義』確

立のための実験材料だつた『座標消滅』…………みんな半月も保たず

に壊れてしまつた。今の彼らの状態だつたらそれこそ死んだ方がど

れだけマシかも知れない。そして私は永久に光を奪われるだけで済

んだ。今やここにいる私達に存在意義はありません』

「だ、だが

』

全てが無駄であつたという真実は如何なる匠の手によつて鍛え上げられた鋭刃よりも残酷に、魔術師の胸を貫き、根幹を搖るがして

いた。

不気味な沈黙が辺りを支配し、ここに一人の青年の大望が崩れ落ちる音を確かにこの場に集つた全員が聞いていた。

だが、

「ハハハ」

永遠とも思われた静謐さを破つたのは、魔術師の口から漏れだした氣の触れたような哄笑だつた。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハツツツツツツ！」

理由の分からぬ恐怖にぞつとして一步退いた歎達を後目に、魔術師は嗤い終えた後の仰け反るような姿勢そのままに平坦な口調で言葉を紡いだ。

「……だからどうしたと言うんだ？ 方法はまだ幾らでもある……ここは学園都市だ、最先端の技術を以てすれば視力を回復させることなど容易いはずだ」

「でも

「それならばもう実験材料を回復させる手立てくらいこの研究員が講じているはずだとでも？ それは奴らが大事な『原石』がこれ以上傷つくことを恐れている故だ。学園都市の最暗部にならば

あるはずだ。例えそこな少女が完璧に壊れるとしても、能

力だけを生かす道が

「ヴァーダント、お前ツ！」

今までの遭り取りの中で一番激昂し、感情も露わに歴が怒鳴った。明日原はおぞましいものでも見たかのように口元を抑えて目を見開き、そして辻霧は

「悪い明日原、ちょっとこいつ預かってて」

いつもの無表情で淡々とそう言つて、戸惑う明日原に『履歴閲覧』を預け、前に出た。ヴァーダントの前に、立ち塞がつた。そして、

ズドドドドツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ

爆発音にも似た凄まじい轟音とともに、辻霧の足下の床から夥しい数の鋭い棘状の『幻影』が爆ぜた。

『幻影』は培養器の幾つかを吹き飛ばし、そのまま消滅した。爆心地にいた辻霧の表情は丁度影になつてよく見えなかつた。いつものように無関心な表情を浮かべていたのかも知れない。しかし、次の瞬間彼の発した言葉に含まれる底知れぬ静かな怒りに、彼の背後にいた三人はおろか、眼前のヴァーダントでさえも僅かながら戦慄する。

「……いやで、国だとか『原石』だとかよく分かんねーよ。めんどくせーし。なんか勝手によるしくやつて下さい……って感じ？」

その言葉自体は普段の彼のものと変わらなかつた。

「んだけどなあ……うん、よく分かんねーけど、ムカついた。とり

あえずお前はぶつ飛ばす」と云ふる

更新空くつて言つたその日中に更新つて何なんでしょうね。
あんまり僕の言つこと信じないほうがいいです。

次回はスーパー主人公タイムです。

あとお気に入り登録がいつの間にか二桁に増えてて吃驚しました。
末長くよろしくね！！

第七章 八月十八日 Rail-Gun-Level?

第七章 八月十八日 Rail-Gun-Level?

啖呵を切った手前、退くわけにはいかない。

普段の辻霧ならば「そんな義務はない」と屁理屈をこねていくらでも退避できたはずだつたが、今の彼にそんな選択肢は思い浮かばなかつた。

ただ、己の内側で突然爆発した感情がメラメラと皮膚を内側から舐め、脳髄を焦がし、目の前の奴を倒せと全身の神経を震わせて絶叫する。その破壊願望はとてつもなく原始的で、そして今まで同じようにずつと存在していたように辻霧には感じられていた。口から迸つた支離滅裂な言葉の羅列も、眼前の強大な敵に向かつて踏み出したこの両足も、合理性の欠片もないものであると頭の片隅で理解していたにも関わらず、なぜか辻霧は「正しい」ということだけは確信していた。

（ああ…………こいつ…………）

その後姿を眺めていた明日原は呆れたように息を吐いた。
(怒り方も知らないんだ……)

「『ぶつ飛ばす』？ 貴様が？ この私を？」

反対に、手にしたショートソードの切つ先まで冷淡な合理性に染まり切つたヴァーダントは、嘲笑とともに辻霧のこの冷たい怒りに真つ向から対峙した。

「つい先日私に敗れたばかりだということをもう忘れたか？ 増してや先刻の短い戦いの中であえ、貴様は私に手傷一つさえ負わせ損ねている……大言壯語も大概にしておけ、少年」

「『つ・じ・ぎ・り・ひ・と・え』だ、クソヤロー」

一音一音区切るように名乗ると、辻霧は背後に佇む暦たちの方を

振り向いて言った。

「『履歴閲覧』連れて先に逃げてろ」

「でも

「分かつた」

暦は明日原の抗議の声を遮つてそう答えると、明日原のシャツの袖を引いて部屋から続く廊下の闇へと走り出した。

咄嗟にウテ・タントか三人に追し縋る二歩踏み出すも、たゞ
りと両腕を下げる辻霧がその進路を塞ぐ。

一行がせねーよ

ヴァーダントは一瞬逡巡するように身じろぎしたが、すぐに優越の表情と共に露を見はじめる。

「ふん、高々数秒の時間稼ぎで私を止められるとでも?」

「アーニング」アーニング」

辻霧の足下から不意に巨大な右腕を模した『幻影』が出現する。

۷۰

「兒戲」

靈装の一閃の前にバラバラに吹き飛ぶ。

魔術師の眼前に『幻影』を

「無駄」

頭上から無数の槍を

「たと

「三万位が此の折只

思い出せ

「のが」

あの時、俺は

ヴァーダントの必殺の刺突が直前に出現した『幻影』の盾を貫き、一瞬で無防備となつた辻霧を

「ほ、本当にあいつ一人残していつて大丈夫だつたの？」

暗い廊下を疾走しながら、明日原が息を切らしつつ暦に尋ねる。

「あの『魔術師』つてやつなんか強そつだつたし……つ、辻霧のアレが効かなかつて」

「大丈夫だ」

それでも、暦は断言した。

「僕が何のために君達を選んだと思つてゐる」

（なぜだ）

？

確かに手応えと共に食い込んだ、ショートソードの切つ先が持ち主の困惑を帶びて揺れる。

（なぜ）

）

どう思考しても眼前の光景を否定する要素は転がつていなかつた。

それこそ、まさしくありえない現象が起つていた。

「なぜ、受け止められてゐる？」

辻霧の背後には歪な人型をした『幻影』が出現していた。その左手が辻霧本体に届く寸前だつた魔術師の剣をがつちりと掴んでいる。その動作に同調しているかのように何もない左手を握りしめている辻霧は、獰猛な笑みと共にヴァーダントの顔を見上げた。

「当たり」

次の瞬間、辻霧は左手を握りしめたまま前に一歩踏み出すと、右

腕を大きく引いた。背後の『幻影』も呼応して右腕を振りかぶる。

予想外の出来事に思考回路の麻痺したヴァーダントは、避けると

いう反射的な動作に手を着けるのに僅かなタイムラグを強要される。

18

維叫と同時に辻霧の『幻景』の拳が喰ひを上にする

ハイルドライバーの如き質量と速度をもって放たれたそれは、狂い違わずヴァーダントの顔面に突き刺さり、部屋の奥へと吹き飛ばした。

倒れて動かなくなつたヴァーダントを見届け、辻霧は大きく一息吐いた。

(い)
一か八かと思ひてやうたけど

田頃の運動不足が祟ったのか、膝が疲労で震え始める。

先刻の戦闘で辻霧が放った『幻影』には特に種も仕掛けもなかつた。『幻影』 자체はヴァーダントとの戦闘中に切り捨てられていたものと変わらない。

では何が勝敗を分けたのか。

辻霧自身、確信を持ってそれを実行に移したわけではなかつた。下手をすれば解釈が間違つていただけで、ヴァーダントの一刀の元に易々と斬り伏せられていた恐れもあつた。

決め手となつたのは初めて出会つたときのあの戦闘。

ヴァーダントが『光の殺戮術式』で辻霧の視界を殺し、辻霧が足下に『幻影』を出現させて辛くもその一閃を逃れたあの瞬間。

（あいつ自身、自分の術式で目が眩んで気付かなかつたのかもしれ
ないけど
）

あの時、辻霧が足場として出現させたあの『幻影』は、咄嗟に四次元上の自分自身を基点に作り出した物だった。そしてカーテナは

その『幻影』を切断し損ねていたのだ。

では、自分自身を基点とした『幻影』ならばカーテナに対抗し得るのかというとそうでもないらしい。その証拠に最初の戦闘で啖呵を切った際の一撃は自分自身の両手を基点にして出現させていた。（何だったんだ……？　何かの発動条件があるとか……？）

辻霧自身、未だに自分の能力に関して未知の部分が多い自分の手のひらを見つめて自問自答していた、その時、

むくりと、魔術師は立ち上がった。強靭な信念のもと、背負わされた重苦しい現実とその重圧に抗うかのように。

口の中を切ったのか、唇の端から細い血の筋を滴らせながら執に取り憑かれたような双眸で仁王立ちする魔術師の姿は、凄絶の一言に及きた。

六千万の民草、九百年の歴史、そして誇りだぞつとして辻霧は一步身を退いた。魔術師の鬼気迫る姿に気圧されたのではない。目の前のこの男は辻霧には理解し得ないものを、そして理解できたとしても到底耐え難い程の十字架を背負っている。その事実が辻霧を本能的にたじろがせた。

血を吐くような絶叫と共に魔術師は真っ直ぐ辻霧達に向かつて走り出し、部屋の丁字路の真ん中に踏み出した。

その、
直後。

ゴバッ！！ という轟音が鳴り響き、辻霧の視界を真っ白な閃光

が染め上げた。

「あ…………？」

一瞬、辻霧には何が起きたのか全く理解できなかつた。
少なくともアレが魔術師による何らかの能力ではなかつたということは分かる。

全身の産毛が逆立ち、辺りの空気が電荷を帶びている。その時に
なつて漸くアレが莫大な破壊力を伴つた超電磁砲のようなものであ
つたということを辻霧はぼんやりと把握した。

超電磁砲は通路の奥から分岐点に踏み出したヴァーダント諸共立
ち並ぶ培養機の様な設備を吹き飛ばしていた。あちこちでバチチレールガン
!! と回線がショートし、次々と爆発しているようだ。

呆然としていた辻霧は天井が崩落する音ではつと我に帰つた。ド
ン！ ドン！ と連続して倒壊していく部屋の中、辻霧は先刻の超
電磁砲が壁に空けた大穴から外に脱出した。

第七章 八月十八日 Rail-Gun-Level? (後書き)

サブタイトルの日付でなんとなく気づいてた方もいたんじゃないでしょうか?

おいしいところは第三位が搔つ攫つしていくの法則でした。

重い体を引きずり、壁に半ば身をもたせかけるようにして一歩ずつ進む。

荒い息を吐きながら、ヴァーダントは街灯の光も射さない路地裏を歩いていた。全身に残る痺れは未だに抜けきっていない。

あれから一時間経つた。

果たして明日の日が昇るのを見られるのかも分からぬほどボロボロの状態の中、ヴァーダントは自分の唯一の武器であったショートソードを握りしめながら己に問うた。

「結局、全て無駄だったのだろうか？」

衰退する故国を見ていた。

今までやつてきたことを、何もかも中途半端な己自身の不甲斐なさを埋め合わせるために口実に貶めたくなかった。

何よりも。

「…………キリエ…………」

背後から自分自身の左胸を貫く腕に目を落としながら、末期の吐息と共にその名を呟く。

どこまでも意氣地なしだったからこそ、こんな手段しか選ぶことが出来なかつた。故国に貢献すれば、学園都市に幽閉される『原石』達を救い出すための援助が得られるだろつと。

「悪いな、ヴァーダント」

腕の主は、自身の殺した相手を見据えることなく誰かに弁明するよつに呟いた。

「テメーにも大儀があつたんだろー哉。それが何だつたのかとか、

「テメーがどういう人間だったのかとか、そんなこと俺らは知らねーからサ」

新河は静かに腕を引き抜くと、冷たい路地裏に倒れ伏した魔術師に背を向けた。

「せめて、許せ」

「欠片の情すら許されない。それが、学園都市の闇。志半ばで意識を失いつつあるヴァーダントに、新河の贖罪の声が届いたかは定かではなかった。

彼自身、胸の内で許しを請うていたから。

（許せ キリエ）

そして、魔術師の意識は混濁の内に墮ちていった。

（

我が異母妹よ）

行間（後書き）

結局、ヴァーダントは弱虫の嘘つきなんですよな。自分自身も嘘して。次回、終章です。

終章 後日 Bad/True_End_End .

「ヴァーダントを消した」

殺人の報告は買い食いと共にひどく無造作に為された。

白い安楽椅子の上に身を横たえて窓の外の景色を眺めていた暦は、異母兄の死を聞いても睫毛一本さえ微動だにしなかった。

暦の部屋の玄関には優男風の外見の青年が腰を下ろしていた。パームを当てた紫色の頭髪に黒いテンガロンハットを被り、端整な顔立ちの半分を眼帯と包帯が覆っている。服装からして休日のガールハントにでも繰り出す都會の若者を想起させた。

彼はコンビニの袋から取り出したバウムクーヘンをかじりながら、なおも世間話の一端の如く学園都市の闇の出来事を軽々と報告する。「君が連れ出した『例のお友達』に関しては第七学区の病院で特殊要人扱い匿名で保護するんだってさ。あと

柔らかいスポンジの塊を嚥下すると、青年はそれまでの軽快な口調とは一転した、事務的な固い声で言った。

「『目立つた真似をするのは今回を最後にしておけ』

「…………、」

なおも沈黙を貫き通す暦に気を悪くした様子もなく、青年は貼り付けたような笑顔で指先に付いた菓子屑を舐めとった。ややあって暦が漸く口を開く。

「……………それだけか?」

「そんだけ。以上、上層部からでしたー。あ、僕が暦ちゃんの顔拝みに来たつてのもあるけどね」

へらへらと軽口を叩く青年に対し、暦は不快そうに眉をひそめた。
「……………その性格でよく今まで生き延びてこられたな、崩音^{くずね}」「僕みたいな人種は公私の区別がちゃんと付くからね」「それじゃ」と立ち上がった崩音は、ドアノブを握ると「あ、そうそう」と開け放しになつていてるリビングのドアの方に顔を向けた。

「『田立つた真似をするのは今回を最後にしておけ』つていうの一応僕からのお願いでもあるから」

「……………」「君が消されたりするのはいつかとしても、まあ、気分が悪いわけだしね。何せ」

「僕ら『マテリアル』の庇護が無きや、君みたいな『原石』に学園都市での人権は無いわけだし」

ドアが閉じ、再び暦の自室には沈黙が充満する。やがて、暦は首をそらして田元を手で覆つた。

観測対象から外された箱の中の黒猫の慟哭を知るものは、学園都市には誰もいない。

「そんであの後、どうなったの？」

本日十五回目の同じ質問に辻霧は頭を抱えた。

『履歴閲覧』奪還戦から一十四時間も経過していなかつた。当然の如く午前中の授業を一時間目まですつ飛ばして堂々と遅刻してきた辻霧は、その後の午後の授業まで居眠りで脱落していた。昨晩明け方近くまで続いた死闘とその副産物である強烈な疲労を鑑みれば辻霧としては当然の帰結と言えるのだが、ほぼ同じ条件下で潑刺とホームルーム十分前に登校し、あまつさえ全講義を集中して受けていた明日原とは随分な落差が見られる。

というか、向こうがおかしいんじゃないかと逆転の発想に至るも、そこから論理的な根拠を導き出せないほど辻霧は疲弊しきつっていた。

「いやさっきから言つてつけど……とにかくなんか電気みたいのが
どばーなつてこいつ……ズドーンちゅーどーんみたいな」

「…………擬音語多様の説明が許されるのって小学五年生までよ、

知つてた？」

呆れたように言つ明日原から辻霧は田をそらす。自分でもまだよく分かつていいような能力の仕組みに下手に触れれば、こいつが一気にめんどくさこ相手に豹変することは嫌と言つほど分かっていた。

「……ま、まあ、一応俺らの知らないところでも色々万事解決したらしいし、いいだろ。終わり良ければさ……」

さり気なく話題を逸らす。

辻霧が田を覚ましたとき郵便受けに投函されていた昔からの手紙には、『履歴閲覧』がとある正規の病院でちゃんと保護されたこと、ヴァーダントはもう学園都市には来ないであろうことが簡潔な文章で書かれていた。

あの魔術師が簡単に手を引いたことに辻霧は小さな違和感を覚えていた
曲がりなりにも一度も生死をやりとりした相手
だつたし、何より彼の悲願のことを思うとどこか居たたまれない。
しかし、同時に辻霧は暦の文面から何か自分が立ち入るべきでない
領分の空気をうつすらと感じていた。

「……どうかした？」

「……いや、別に」

顔を覗き込んでくる明日原をそれとなく押しとどめ、辻霧は暗澹とした気分で校門を潜つた。

ともあれ、自分達にとつての非日常は昨晩で終わりを告げたのだ。下手に立ち入るべきではない。日常に、そんな靴紐に対するものと同程度でも、ある程度の愛着を持つてゐほど自分が成長したことに辻霧は気付いていなかつた。

だから。

「……よお

晩と地続きの非日常が目の前に姿を現さなければ、それを惜しむくらいはできたはずだった。

そいつは Yシャツに深緑色のズボンという、一般的な男子高校生の格好をしていた。ダークグリーンのタイに、校章が刻まれた金色のピン。赤みがかつた跳ねた茶髪は、濃い眉が目立つ誠実そうな顔立ちにあまり似合つていなかつた。

辻霧の後から校門を潜つた明日原が、突然立ち止まつた辻霧を見て目の前の青年に目を留める。

「真柴見教育学院の校章
してアンタの友達……？」

そう尋ねかけた明日原の声が尻すぼみに消えていく。
無理もない。

見上げた辻霧の表情は、今まで明日原が見たこともないものだつた。別にそれほど長い付き合いではないが、それを差し引いても明日原が人間がこんな表情を浮かべる場面を直に見たのは初めてのことだつた。

怒りでもない。恐怖でもない。憎悪でもない。

だが、確かにそこには強烈な嫌悪感と憤怒と悲哀がない交ぜになつていた。

唇が、微かに震えた気がした。

気が遠くなるような時間をかけて開かれた口から、乾いた喉を引き絞るような声が漏れる。

「つ、
橡つるばみ
……
？

橡妃憂きゆうひ
か

？

「」

非日常の歯車が、再び回転しようとしていた。

第一話、完結です。

どうにも締まらない終わり方で申し訳ない・・・作者自身、この結
末は嫌いです。

ただ今回はトゥルーエンド＝バッドエンドを主体に書きました。自
分では正しいと思った分岐を選択していくも、最終的に行き着いた
先がバッドエンドっていう。

あと原作との絡みを前回より増やしました（微妙すぎる）。
続編があればもっと絡めていきたいです。
それでは。

追記

大幅加筆しました・次の話につながらないので・・・
次回はずっと鏡大路のターンの予定です

おいはきよみ
及
萩曆

> i 10416 — 1467 <

なぜか女子禁制の第一八学区の寮にいた風変わりな少女。辻霧の隣人。

プラチナブロンドの長髪に右目周りにだけ魔術的なデザインのマイクを施した奇抜な外見。常に黒い長袖の服を着ている。

「けだし」という特徴的な話し方をする。一人称は「僕」。

世界に散らばる五十人の原石の一人。能力は分歧世界の全ての自分と体験を同期できる『シユレー^{ブラックボック}ディングガード』の猫^ス。来日する前の本名はキリエ。

ヴァーダント・ブレイドアクト

> i 10418 — 1467 <

英国の宝剣カーテナの復活のために原石『アカシックレコード』^{履歴観覧}を狙つて学園都市に侵入した魔術師。

チェック柄のマントと大量のピアス、左目の下の青い涙型の刺青に薄茶色に染めた雑草のように無造作なヘアスタイルが特徴。

カーテナの『全次元切断術式』とデュランダルの『現象切断術式』、レーヴアテインの『光の殺戮術式』、フラガラッハの『必殺術式』（いずれも未完成）を取り入れた靈装カーテナ=レプリカを持する。

英國騎士団を中途で脱退し、『必要悪の教会』に所属していた過去を持つ。

おまけ

新河&ヴァーダント

> i 1 0 4 1 9 — 1 4 6 7 <

崩音

> i 1 0 4 2 0 — 1 4 6 7 <

前期期末考查開始直後

> i 1 0 4 2 1 — 1 4 6 7 <

眼鏡明日原

> i 1 0 4 2 2 — 1 4 6 7 <

幻影燈機模式図（第一話 第五章より）

> i 1 0 7 1 2 — 1 4 6 7 <

設定2（後書き）

梵さんのリクエストに関してはあとで更新します；
あ、ちなみに
ねーちゃんくくくくくくく明日原く新河く美琴く鏡大路く黒子
です。別に何がとは言いませんが。

第一章 八月十四日 Feeling_Defeat · (前書き)

諸君、私は百合が大好きだ。

第一章 八月十四日 Feeling | Defeat .

第一章 八月十四日 Feeling | Defeat .

p.m. 4時20分。約一ヶ月振りに外の地を踏んだ鏡大路薪奈に八月半ばの陽光が降り注いだ。

「また暫くの内に随分と暑くなつたものだな……」

日除け代わりに額の辺りに左手をやりながらそう言つ鏡大路の背後から、まだ変声期を迎えていない少年の声がかかる。

「薪ちゃん、荷物もうこれだけー？」

「ん？ ああ、そつだつた……」

彼女の従弟で風紀委員である逆浦透通さかうらとしどおが、彼自身がすっぽり収まつてしまいそうな大きさのスポーツバッグを抱えて病院の正面玄関から現れた。今日のためにわざわざ担当が入つっていた本部常駐を空けてもらつてきららしい。

彼の瘦躯を気遣つて鏡大路は逆浦の方に駆け寄つた。

「すまんな。ここからは私が持つから……」

「大丈夫だつて。僕はもう男子中学生なんだから子供扱いはよしてよ」

「しかし風紀委員の業務を代わつてもらつてきているそつだし……」

「んじやせめてバス停まで」

やけに食い下がり、意地を張るように荷物を抱えたまま早歩きでバス停に向かう一歳年下の従弟に気後れしつつ、鏡大路は彼の後を追つた。

先月十二日、鏡大路は逆浦の住む第一八学区で多発していた連続通り魔事件の犯人と交戦して返り討ちにあい、四肢を切断されるという重傷を負つた。第七学区のある医者のおかげで一命は取り留

め、四肢も失わずに済んだものの、思い通りに体を動かすにはやはりある程度リハビリが必要であったため、術後の意識回復まで一週間、リハビリに約一週間もかかり、現在に至るというわけだつた。今では傷もほぼ消え、通り魔事件が学園都市につけた爪痕は今や完全に皆の記憶の中から風化しようとしていた。…………かに見えた。

しかし、鏡大路の中では事件は何の解決もしていなかつた。いや、寧ろ事件の解決が引き金となつて、彼女の中に墨滴の如き黒い波紋を呼び起こしていたといつてもいい。

（…………不甲斐ない…………）

名門常盤台中学校が擁する四十七人の大能力者たる鏡大路にも、自分の能力が他者を傷つけることに嫌惡の情を禁じ得ないとはいえ、プライドというものがあつた。何かにつけどこか完璧主義的な傾向がある彼女にとつては、今回自分が守ると決めた逆浦に対しても返り討ちにあつたことが情けなかつた。だがそれ以上に、

（…………あの野郎）

鏡大路が意識を回復した七月十六日、逆浦の口から伝えられたある事実と彼が冗談めかして付け加えた憶測は、彼が病室を出た直後鏡大路が拳を病室の壁に叩きつける衝動を掻き立てるには充分すぎる情報だつた。

辻霧单。
つじぎりひとえ

鏡大路が常盤台に入学してから間もない頃に出会つたその男に対して抱く感情はかなり複雑なものだつたが、彼のそんな自分にも勝るとも劣らない強さに反するやる気のない姿勢には、同じレベル4として鬭争心を煽られるものがあつた。

故に、一連の通り魔事件が、よりによつて自分が膝をつく結果と相成つた事件が、彼によつて終止符を打たれたという眞實に、鏡大路は自分自身の能力によつて意識を失い倒れ伏すあの瞬間に感じたそれよりもさらに強烈な敗北感を味わつたのだ。

自分は、弱い。

その自覚は、へし折らんばかりに彼女の根幹を搖さぶつた。

我知らず歯を食いしばっていた鏡大路は、前を歩く逆浦が足を止めたことでバス停に着いたことに気付いた。

「荷物」

「おう」

着替えや洗面用具等を小分けにした荷物がぎつしりと詰まつたスボーツバッグを受け取る。急な入院だつたためにどれくらいの期間入院するのかなどといったことが分からず、後から繼ぎ足すように寮から持つてもらつていたためにこうなつてしまつたのだ。バス停に設置されていたベンチに鏡大路が腰掛けると、逆浦は一瞬逡巡するような素振りを見せたが、彼女の隣に座つた。

「まだ大丈夫なのか？ 風紀委員の方……」

「あのね薪ちゃん」

不意に鏡大路の言葉を遮るようにして逆浦が切り出した。今までの彼には見られなかつた唐突な言動に、鏡大路は口を噤んでしまう。自分の膝の辺りを見つめながら、逆浦は言葉を慎重に選ぶようにして続けた。

「……今回は運良く生きて戻つてこれたけど、もうあんな無茶はやめて欲しい」

「…………、」

逆浦の横顔に違和感を覚える。いや、正確に言えばそれは違和感とは違う……もつと、別な何か。自分が今まで絶対的信頼を置いてきた人物に、一番自分が触れて欲しくない弱い部分を抉り出されるような。

「薪ちゃんが強いのは分かつて。僕はそんな薪ちゃんを尊敬してゐるし、よく守つてくれてるのも感謝してる。自分にとつて……大事な人間だとも思つてる。けどさ」

その続きを鏡大路は聞きたくなかった。心臓が干からびて縮こまるような彼女の心境が無言で悲鳴を上げるのにも無頓着に、逆浦は言った。

「僕は薪ちゃんが思つてゐるほど弱くないよ」

「……そんだけ」

そう言つて立ち上がると、逆浦は初めて弱々しい笑顔を鏡大路の方に向けた。

「ごめん、何て言つかその……僕は大丈夫だよつて。うん、じゃあ、お大事にね」

「……ああ、今日はどうも」

軽く手を振つて鞄を担ぎ直し、逆浦はバス停から駆け去つていつた。

後に取り残された鏡大路は、挙げかけた片手をそのまま顔の上に持つていくと、内臓を吐き出すようなため息を吐いた。

「最悪だな……」

自分。

ひよつとして、もしかしたら自分は逆浦といつ自分の庇護の下にあると想い込んでいた弱い存在によつて、自分は強いのだと錯覚していただけだつたんじゃないだろうか？

ビルの合間から覗く入道雲が、鏡大路の頭を押さえつけるようにして聳えていた。

一度手間をかけたくなかったので、寮に帰る前に常盤台中学の方に寄つた。夏休み前の長期入院のせいで前期成績表を受け取り損ねていたからだ。

荷物をロッカーに詰め込んだ後、職員室で担任に心配をかけたことを丁重に謝罪し、成績表を受け取つて廊下に出たその時だつた。

「……うえ？ かがみんじゅん？」

清涼飲料水のCMとかに起用されそうな澆刺とした爽やかな声に、嫌な予感を覚えながら鏡大路は振り返った。というか、こんなふざけたニックネームで自分を呼ぶ人間など彼女の脳内検索エンジンでも一人くらいしか思い当たらなかつたので、それはほぼ確信に近かつたということも付け加えておく。

常盤台の制服を着た少女が鏡大路の方に走ってきた。すらりと伸び、程良く日焼けした健康的な四肢が目を引く。今はなぜかしつとりと濡れている茶色味がかつたセミショートのヘアスタイルに、水玉模様のカチューシャがよく似合つていた。

「……久し振りだな、白亜」

今更ながらルームメイトに退院の日時を知らせていなかつた自身の迂闊さに気付く鏡大路。白亜

白亜由来は、やや息を

弾ませながら、

「ちょいと失礼」

そう言つと、突然鏡大路のスカートをめぐり上げてその中に顔を突つ込んだ。

「なつ

！」

当然の如く繰り出された鏡大路の膝蹴りが顎にクリーンヒットし、廊下に白亜が仰向けにぶつ倒れる。当然白亜の頭にはね飛ばされて鏡大路のスカートの中身も前方に向かつて大公開する形となつたのだが、幸いぶつ倒された白亜も含め目撃者はいなかつた。

「えでで……やだちよつと何するのもー」

「こつちの台詞だこの変態！……！」

やや顔を赤くしながら鏡大路はスカートを押さえ、摺り足で白亜から一メートルほど距離をとる。

「ちーがうつて。傷痕とか残つたりしてないかなーとか気になつてさ。うわ、やだなあかがみんやらしー想像してたでしょ今」

「なら聞けばいいだろ！！ 出会い頭人のスカートに顔を突つ込む人間がどこの世界にいるんだ！！！」

「にゅはは、眼福でした」

側頭部に飛んだローリングソバットは生憎空振りに終わる。

所属する水泳部ではエースとして崇められ、校内でも爽やかな運動部系少女として認知されている白亜由来だが、その実態がこれである。おまけに重度のドMだ。

「お詫びにあたしのパンツ見る?」

「……何の得もないしじうせまた水着だろーが」

「やん、見ない内から言い当てるなんてかがみんエッチー」

三発目の踏みつけは顔面に入ったが（無論靴を脱ぐくらいの配慮はあった）、心なしか白亜が喜んでいるようだったので気持ち悪くなつてすぐに引っ込んだ。案の定喜色満面といつた表情だった。

本人曰く「常に水泳部である心掛けを忘れないため」に常時制服の下は常盤台指定の水着を着用している白亜なのだが、本音はほとんど着てない感触がないからだそうだ。「すーすーして気持ち一じやん」と部屋で宣う白亜に蹴りを見舞うこと数多だが、一々嬌声をあげて喜ぶのでもう半分諦めていた。罵倒してもせらうにねだつてくるし。

外面はいいので余計に質が悪い。

「んーでもちよつと傷つくなー、ルームメイトのあたしに退院日伝え忘れるつてやー。お見舞いも行つてあげたのになー」

「んじょっ」と立ち上がった白亜が上目遣いのジト目で鏡大路の顔を覗き込みながら恨みがましく言つ。さすがにこれには鏡大路もやや罪悪感を抱いた。

十六日に白亜が文字通り頑丈な病室のドアを蹴破つて見舞いにきたことを鏡大路ははつきり覚えていた。あの時は確か散々顔中からありとあらゆる液体を垂れ流しにしながら鏡大路の安否を気遣い、山のような見舞い品を置いて嵐のようになって行つたのだった。たまたま居合わせた逆浦が今し方空飛ぶスパゲッティモンスターでも目撃したような顔をしていたのは記憶に新しい。

「いや……すまん……ちょっと、色々立て込んでたんだ」

気まずい思いをしながら大人しく軽く頭を下げる鏡大路を見て、白亜はなぜかきょとんとしていた。

「…………？ 何だ？」

「いや…………こつものかがみんらしくないなあと思つてさー」と言いつつ白亜はしつかり自分の方に差し出された形の鏡大路の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「…………おー」

「にゅはは。いやでもねー、なんか今日のかがみんは弱々しい」ドス、と今し方までの蹴りのダメージが三倍になつて腹に突き刺さつたような錯覚を覚えた。認めるのは悔しいが、白亜の洞察力は確かに高い。

…………それが鏡大路に対してのみ、といつことであれば話はまた別だが。

「ない。そんなことは断じてない」

力なく放られたチヨップを白亜が「うりゅ」と弾く。

「うつそだー何かあつたでしょー」

「…………、」

「じゃあ正直に教えてくれたら忘れてたこと許しちゃる」

ぽんと柏手を打つて提案する白亜に、鏡大路はやや躊躇する。

「あ、ほらほらー普段だつたら」り押しするくせに」

…………ハメられた。

険悪な表情で自分を睨む鏡大路に対し、白亜は「にゅははー」と笑いながら、

「でも今は水泳部のミーティングがこの後あるのねー。だから寮で、ね」

そう言つてぱたぱたと廊下を走り出す白亜。なんだあいつ、素足で校内に上がるなよ。

と思つた矢先、白亜が引き返してきた。

鏡大路の制服の襟首をぐいっとつかむと鼻先が触れ合いくらい顔を近づけ、強引に視線を合わせてきた。あまりに唐突だったので鏡

大路は思わずドキリとした。

「あのね」

普段とは違う白亜の口調に気圧される。

「かがみんはもつと他人を信用して、頼つた方がいいと思うよー」
そう言い終えると、白亜はべろりと舌舐めずりした。その瞳にいつのまにか普段の悪戯っぽい光が宿っているのに鏡大路がはつと気付いたときには既に遅かった。

「ひやんつ！！」

白亜の舌がついつと鏡大路の首筋をなぞり、制裁の蹴りを食らつ前に離脱する。

にやりと笑みを浮かべたまま脱兎の如く安全地帯まで駆けだした白亜が、廊下の向こう側から声を投げつけてきた。

「ごちそーさまー。お嬢ちゃんいい反応ですなー」

「死ね！！！」

誰もいなくなつた夏休みの学校の廊下で、鏡大路は乾いた溜息を吐き出した。

「お帰り」

十分後、足を踏み入れること久しい自身の学生寮に戻つた鏡大路に声がかかつた。

大方予想は付いていたのだが、エントランスを過ぎたところで寮監が待ち受けていた。いつものクールな表情には、特に歓喜も心配も憤怒も見受けられない。

曰く第三位のレベル5を能力開発を受けていない身の上であるにも関わらず平然と下せるなど、この寮監の蛮勇に関しては色々と聞き知つてはいたのだが、よく考えるとこうしてまともに話した記憶は鏡大路にはなかつた。精々消灯時間の勧告の際に見かける程度だ。とりあえずぺこりと頭を下げる。

「色々とお騒がせしました」

「構わんよ。兎にも角にも、無事五体満足で帰つてきただけで充分

た

卷之三

寮監はヒールの音も高く静かな威圧感を纏いながら萎縮する鏡大路の方に歩み寄つたが、傲然とした雰囲気に反して優しい拳動でほんと頭に手を乗せた。

やつ合おうとした結果いつになつたやうじやないか」「 が二

「おまえ一人の体じゃないんだ。心配する者もいるだろう。その辺りの冷静さを欠く、軽率な行為だつたと思わんか？」

「……深く反省しています」

「一分か二分でいいならそれでいい。お前は他人を傷つけないことを最優先に考えるから、余計に孤独に走ろうとする傾向がある。悪い癖だ」

それほど交流の少ない寮監にここまで見抜かれていたことに鏡大路は軽く驚愕した。寮監はなおも続ける。

「その姿勢に隠された真意は評価に値する。たがな、それによってお前自身が傷つくことを恐れる人間がいることを忘れるようでは、自分勝手と言わても仕方がない。お前も常盤台が擁する四十七人のレベル4の一人だ。そのくらいのことが分からなければ、下にいる者達に示しが付かないだろ？」

「……仰る通りです」

今日になつて、全く同じことを二度も言われた。唇を噛みしめて

俯く鏡大路に、寮監は優しく言葉をかける。

の失敗を決して忘れるな。それが、私がお前に言える全てだ

「…………はい」

突然寮監は鏡大路の頭に乗せていた手を引っ込めて両肩に手を乗

せると、自分と向き合っていた鏡大路の体をぐるりと逆向きにした。

「…………？」

まだ事態を理解していない鏡大路に、先ほどまでは打つて変わった厳格な口調で判決が言い渡される。

「さて、お前自身の人間性に関する反省はともかくとして、校則を破つたことに関してはまた別の罰が必要だろ？ そうは思わんか？」

寮監の腕が、鏡大路の首にかかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873m/>

とある次元の幻影燈機

2011年5月17日08時01分発行